
Marvelous mercenary

河野 る宇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M a r v e l o u s m e r c e n a r y

【Nコード】

N 7 2 6 2 Q

【作者名】

河野 る 宇

【あらすじ】

＊その青年は“M a r v e l o u s m e r c e n a r y”（マーヴェラス・マーセナリイ）「素晴らしき傭兵」と呼ばれていた。彼はつぶやく――『運命とはかくも複雑なものか。と改めて感じた。小さな出来事だと思われたものがこれ程、大きな結果を招くとはね……』<現代ファンタジーです>

小説サイト「野いちご」にも投稿させていただいている作品です。

* 奇縁・きえん *

青年はのんびりと街を歩いていた。金髪のショートヘア、エメラルドの瞳。25歳ほどの青年は黒いＴシャツに前開きの長袖シャツを合わせ暗めのジーンズを履いている。

174cmの身長と細身の体は道行く人々の中にあって小さく感じられた。

荒涼とした大地が大半を占めるオーストラリアという大陸で、彼は観光気分で歩みを進めていた。

もう何度も訪れたこのダーウィンという街——オーストラリア連邦ノーザンテリトリ―準州の首府。オーストラリア大陸北側のチモール海沿いに位置する街だ。

乾季と雨季を持つ熱帯気候帯にあり、季節は日本と真逆になる。5月から9月までの乾季で、6月の今の季節は涼しい時期だ。

青年は好奇心にかられて路地裏に踏み込む。細い道というものは、どうしてこう好奇心をそそのめるのか。

「！」

そんな青年の耳に幾人かの急ぐような足音。

「……………」

誰かが追われている……………？ 左の路地から、こちらに向かってくるようだった。

*** 奇縁・きえん - (後書き)**

奇縁・^{きえん}不思議な因縁。また、思いがけない不思議な縁。

*エメラルドの青年

「！」

音のする方に足を向けた刹那——十字路になつた右の道から人影が飛び出してきた。

「うっ！？」

人影が青年に驚いてけつまづく。

「おっ……と」

青年は、そんな人影を上手く受け止めた。人影は暗めのフードを深々と被っており、伝わってくる感触で女だと解るもののそれ以外は掴めなかった。

その女は受け止められてホッとしたが、急いで身を起こす。

「！」

2人は同時に驚いた。

青年は、その鮮やかな赤い髪と瞳に。少女は、その整った容姿とエメラルドの瞳に。

「ミレア様！」

そんな男の声に2人はハツとする。

「あ、アレウス」

駆け寄ってきた若い男に、赤い髪のミレアと呼ばれた少女はホッとした。

そしてアレウスと呼ばれた肩までの栗毛に^{こがねいろ}黄金色の瞳をした20代後半と思われる青年は、金髪の男に^{にら}睨みを利かせた。その目に金髪の青年は肩をすくめる。

「！」

何か言おうとしたアレウスだったが、スーツを着た5人ほどの男に囲まれる。

「……っ」

アレウスはミレアを護るように身を寄せた。が、この人数では彼

女を守りながら戦えそうにないと奥歯を噛みしめる。

「もう逃げられないぞ」

1人の男が言う。金髪の青年など眼中にない、といった態度だ。しかしミレアは、その青年をじっと見つめていた。

「……」

この人……この状況で少しも驚いたり、うろたえたりしてない。

「……ふむ」

青年は、明緑色の瞳で男たちと2人を交互に見やる。

「！」

そして、ずっとアレウスたちに近づいた。

「どうやら、こちらに付いた方がよさそうだ」

「……何？」

いぶかしげに睨むアレウスに、さらに発する。

「お前は左の2人を、私は残りの3人」

「！」

助けてくれるというのか……？ アレウスは少し驚いたが、この状況を打破するためには従った方がよさそうだ。

金髪の青年は体勢を低くすると目の前の男に駆け寄った。

「！」

スーツの男の1人が、驚いて銃口を突きつける。

「ぐあっ！？」

青年はその手首を左手で掴むと、くるりと回り男の首近くにナイフを突き立てた。アレウスはそれを見て目を丸くしたが、言われた通り左の男たちに回し蹴りを食らわせた。

「きつ、きさま！？」

金髪の青年は、言った男の腕を払いのけナイフを心臓に突き立てる。声もなく崩れ落ちる男から視線を外し、腰から左手で銃を取り出して残りの男1人の腹部を撃ち抜いた。

「……」

あまりの鮮やかな攻撃に、アレウスもミレアもあっけにとられる。

青年はハンドガンを仕舞うと2人に向き直った。

「とりあえず倒したが、また追手が来るんじゃないのか？　ここから離れた方がいい」

そう言い、手を軽く挙げて歩き去る。

「……」

「！　ミレア様？」

ミレアは、そんな青年の後を追った。驚いたアレウスだが、ここで引き留めて追手に見つかる訳にはいかない。
警戒しながらミレアのあとを追う。

「……」

青年は自分のピックアップトラックまで来ると、後ろから付いてきた2人に目を向けた。

「何か用か？」

「名は？」

アレウスは、何か言いたげなミレアを一瞥し先に口を開いた。

「ベリルだ」

「あなたは……っ」

ミレアは一瞬言葉を詰まらせる。胸の前に組んだ手を強く握り、怖々と口を開いた。

「何か、しているのですか？」

見事な闘い振りに、彼女はそう問いかけた。

「ああ……」

ベリルという男は、「そんな事か」というような声を出したあと付け加えるように発する。

「私は傭兵ようへいなんだ」

「傭兵……？」

アレウスはピクリと反応した。

「早く逃げた方がいい」

ベリルは言つて、車に乗り込もうとくるりと背中を向ける。

「！ ま、待つてください……っ」

ミレアはベリルを呼び止めてフードを脱いだ。綺麗に流れる背中までの赤い髪と、ルビーのような大きな瞳。少女はベリルに近寄った。

「お願い…… 私たちを助けて」

「ミレア様!？」

突然の言葉に、アレウスもベリルも少し驚く。しかしベリルはすぐ、丸くしていた切れ長の瞳を戻し険しい表情で聞き返した。

「私に依頼するという事か？」

「そうです」

「何を言うのですミレア様！」

当惑するアレウスに顔を向けたミレアは、言い聞かせるようにゆつくりと語る。

「アレウス。私たちは『外』に慣れていません。2人だけで逃げ続けるというのは、無理だとは思いませんか？」

「それ、は……」

それに、アレウスは言葉を詰まらせる。

「……」

ベリルはそんな2人のやりとりをしばらく見つめたあと、親指でオレンジレッドの車を指し示した。

「とりあえず乗れ。ここにいるのは危険だ」

助手席にミレア、後部座席にアレウス。

「状況がいまひとつ掴めんのだが」

ベリルは、車を走らせながら苦笑いで言った。

「……私は追われています」

「みたいだな」

「ミレア様は捕まる訳にはいかないのだ」

しばらく沈黙する2人。言うことを選んでいるようだ。

「お前たちは自分の国から出た事が無いのかね？」

「！」

「どうしてそうだと……？」

アレウスの問いかけに、ベリルはしれつと応える。

「先ほど彼女が『外』と言った。そういう意味かと思ってね」

「あ……！」

ミレアは口に両手を当てた。

「……我々は、遙か中国の山奥にいた」

「！ ほう……？」

ベリルはそれに、少し怪訝な表情を浮かべる。それもそのはず、彼らの顔立ちは中国を推測するにはほど遠い。

むしろ、西洋人と言った方が納得する。

「俺たちは、元々中国にいた人間じゃない。遙か遠い昔に住む場所が無くなり、流れているうちにそこにたどり着いたらしい」

「国が無くなった？」

「いいえ、大地が沈んだのです」

沈んだ……？ ベリルは、ますますいぶかしげな顔になった。

「俺たちの祖先がいたのは……大西洋上にあった大陸だと云われている」

「！ 大西洋上？」

聞いたベリルは口の端をつり上げた。

「アトランティスがあったとされる場所だな」

「言い伝えが本当かは解らないが、そう聞かされている」

「私は、そこでひっそりと暮らしていました。誰にも知られず、平和に……」

ミレアの顔が陰りを見せる。アレウスは眉間にしわを寄せそのあとを続けた。

「それが突然、誰かがミレア様を連れ去った。俺はミレア様を助け出すために、そいつらを追ったが……」

「相手が多すぎたか」

「あなたに出会えた事は、きつと運命です」

ミレアは静かに言った。

「運命。ねえ……」

ベリルはクスツと小さく笑った。

「依頼するなら報酬は頂くが」

「当然です」

「我々は恩を知らない者ではない」

ベリルは、2人を見て溜息を漏らした。

ひっそりと山奥で暮らしている民族……？ 報酬など払えるのか

？ タダ働きの予感がして、ベリルはキャンセルしたい気分になった。

しかし……ミレアの悲しげな表情に見捨てる事が出来ない。

「……仕方がない。か」

我ながら損な性格だよ。ベリルは、自分に呆れて笑いをこぼした。

*術よく・すべよく・

「どこに向かっているのですか？」

目的があるように走っている車に、ミレアがベリルに問いかける。

「私の住処^{すみか}。今の処、追尾している車も無いようだし」

「君は本当に傭兵なのか？」

後部座席からアレウスがベリルに問いかけた。

「傭兵の動きにしては素早すぎる」

それに、ベリルは肩をすくめた。

「ハンターとリリパットにも技術を学んだのでね」

「それはなんですか？」

ミレアが首をかしげる。

「ハンターというのは……まあ大体解ると思うが、依頼されて対象を捕える者だ。指名手配犯なども捕まえる事がある。小遣い稼ぎだな」

一端、言葉を切り続けた。

「リリパットというのは我々の言葉で義賊^{ぎぞく}を意味している」

説明しながら、ベリルは2人について考えをめぐらせていた。

彼女の言葉遣いからして、民族のトップに立つ者の子供か何かだろう。そしてアレウスはそれを護る者……もしかすると代々受け継がれているのかもしれない。彼の言動からは、脈々と受け継がれている何かを感じた。彼らが使っている言語にもベリルは眉をひそめた。英語ではあるが、アメリカともイギリスともオーストラリアともとれる。

彼らの言葉を全て鵜呑み^{うのみ}にするなら、彼女の祖先はかつて王族だったのかもしれない。そこまでの推測を話したとして、彼らは素直に頷く^{うなず}のだろう。

しかし彼女が何故、狙われているのか。その質問に彼らは答える気配は無い。知られたくないのか、それを知ったベリルが狙う立場

に転じる事を懸念^{けねん}してなのか。

「……」

図りかねたが見捨てる事が出来ない以上、しつこく聞いて敬遠^{けいえん}されるのも困る。その部分については詳しく言及しない事にした。

住宅街に入り平凡な家の前に車を止めて、持っている小さな楕円形をした黒い物体をガレージに向けるとシャッターが独りでに開いた。ゆつくりと入り車を駐める。そうして3人は車から出ると家に上がり込んだ。

「！」

アレウスは玄関の扉に目がとまる。一見、普通の扉のように見えるがその材質は金属で頑丈^{がんじょう}に出来ている事が窺えた。奥に進みながらあちこちに目をこらす。

「……」

この家は……普通の建物じゃない。さながら小さな要塞だ……

「！」

気付いたアレウスに、ベリルはニヤリと笑う。

「……っ」

こいつ何者だ？ アレウスはベリルに少しばかりの疑問を持った。

ベリルは2人をリビングに促し自分の荷物をキッチンの端に置いた。

「とりあえず何か買ってこよう」

「え……？」

「住処とは言うが、ここは倉庫みたいなものでね。いつもはホテルを転々としている」

色んな国から依頼が来るのでね。と言ってカードを出す。

「中にいれば心配ない。すぐに戻る」

玄関に向かったベリルが、思い出したように上半身を少し傾けてアレウスたちに指を差す。

「ああ、なるべくキッチンとリビングから出るなよ。一応は警報装置が設置されているからな」

言って、ベリルはさっさと出て行った。

「……」

アレウスはキッチンに向かうとキョロキョロと何かを探し始める。

「！」

開けると、それは食器棚だった。そこからコップを1つ取り出し、冷蔵庫を開ける。

「本当に何も無いな」

軽く見回して溜息を吐きつつ、水道に手をかけて水をコップに注いだ。水の入ったコップをミレアに手渡す。

「ありがとう」

山奥にいたにしては彼らの動きに違和感はない。

それもそのはず。彼らはある程度の年齢になると自分たちの住処を離れ、世界各地に移り住む。アレウスは世界を知るため、13歳の時に仲間の住処で数年過ごし17歳になるミレアは彼の見てきた事を聞き学んでいた。

そうして金を稼ぎ、物資などを送る。仲間を愛し、年齢を積みとその集落に戻ってくるのだ。時には、そこで知り合った人間を連れてくる者もいる。

「……？」

しかし、科学はすさまじい発展を遂げている。アレウスにも解らない部分がいくつかあった。

「アレウス……このテレビ。リモコンはこれですよね？」

「はい、そうだと思います」

「知らない名前が付いているボタンがあります……」

「ひとまず、解るボタンだけ押せばいいのではないのでしょうか」

「それもそうですね」

実は、アレウスが学んだ国は日本だ。英語をほとんど話す事が出

来ない人間の多い日本では、かなり苦労した。さらに、外来語となつてゐる英語に戸惑う事も多かった。

それを考えると、このオーストラリアという国は実に過ごしやすい。ただし、食事については日本は世界一だと思ひ起こした。

「ただいま」

ベリルが呑気に帰ってくる。そんな彼に、ミレアはリモコンを握りしめて見上げた。

「ベリル。聞きたいことが……」
「ん？」

一通り説明したベリルは買ってきた食材を冷蔵庫などに仕舞つていく。テレビを見つめる2人にクスツと笑つた。

「！」

ベリルはふと、ミレアの髪にかかつてゐる髪飾りに目が留^とまる。

ミレアに近づき怪訝な表情を浮かべて訊ねた。

「これは……？」

「あ！」

髪に触れるベリルに一瞬驚く。

「それはミレア様の母親の形見だ！」

アレウスはベリルから護るように慌てて間に入つた。

「形見？」

「ミレア様の母上は、ミレア様がお生まれになつてすぐ他界されたのだ」

「ほう」

怪訝な表情を浮かべてベリルは手を差し出した。

「見せてみる」

「！」

「何をする気だ！」

警戒する2人に、ベリルは大きく溜息を吐き出す。

「いい加減、信用したらどうなんだ。いいから見せる」

「簡単に信用できるものか……」

彼の言葉から、随分すいぶんと重たい何かを背負っているのだと窺える。

「……」

ミレアは恐る恐る髪飾りを外してベリルに差し出した。それを受け取り、しばらく眺める。

「あつ！」

「！ 貴様っなんて事を……っ」

髪飾りを分解したベリルに2人は声を上げた。しかし、中から出てきたものに目を見開く。

「……！？」

「それは何だ……」

「なるほどね」

ベリルはニヤリと笑った。

「1つ聞くが、捕まっつてすぐ逃げた訳では無いのだな？」

「おそらく、2日ほど彼らの処にいたと思います……どこかに運ばれる途中でした」

「これは一体、何だ？」

アレウスはマジマジと、ベリルの手の中にある機械を見つめた。

「発信器だよ。彼女が逃げた時のために取り付けたのだろう」

そこで、はたと気付く。

「……ちよつと待て」

「なんだ？」

ベリルはアレウスに顔を向けた。

「どうやって彼女の場所を突き止めたのだ？」

「俺の一族は、ミレア様の一族の気配を追う能力がある」

「……ほう」

その答えにベリルは少し当惑した。便利は便利だが科学的な説明が思いつかん……

「まあいいか」

その点についてはスルーを決め込む事にした。ベリルは髪飾りを組み立ててミレアに手渡す。

「発信器が付いていた。という事は、この場所が相手に知れてしまった可能性があるな」

「！」

その言葉に、ミレアとアレウスはビックリと体を強ばらせた。

「まあ、まず腹ごしらえといこう」

ベリルは言ったあと、ニコリと笑って腕まくりした。キッチンで何かを始めたベリルを、2人はいぶかしげに見つめる。

「……お料理。ですか？」

「腹が減ったろう？」

ベリルは魚をまな板に乗せて手際よくさばいていく。ミレアはそれをまじまじと眺めた。

「お上手ですね」

「独り身なのでね。外食ばかりではトレーニングが無駄になる。ああ、そこにブレッドがあるからバスケットに入れてくれないか」

「あ、はい」

「……」

イスにちょこんと腰掛けたミレアとアレウスは、目の前に出された料理に目を丸くした。

「凄いですね……どういった料理のですか？」

ミレアの問いかけに、ベリルはパンを1つ取って薄く切りながら説明する。

「ヒラメのムニエルと、コンソメスープ。ブレッドにガーリックバターを塗って焼く」

ガーリックバターを軽く塗ってトースターに入れた。

「冷めないうちに食べてくれ」

「！……美味しい」

ミレアは1口食べて驚いた。

「こんなの初めて食べます」
そんなミレアに、ベリルは柔らかな笑顔を向けた。

*術よく・すべよく・（後書き）

術よく・^{すべ}ちうぱじと。手際よく。

* 凄艶の大地 - せいえんのだいち -

食べ終わったベリルは旅の支度を始めた。ガレージの中で積み込み作業をする。

「移動だ」

言いながら、荷物をピックアップトラックの荷台に乗せるようにアレウスに指示する。

「どこに行くんだ？」

「アデレード。車だと数日かかるが、まあ楽しい旅さ」

「！」

アレウスは初めから積みれていた荷物に怪訝な表情を浮かべた。

「……」

何か……金属の細長い大きなモノだ。

深緑の布で覆われているため、それが何なのかは窺い知ることが出来ない。

「本当は後部座席の方がいいんだがな」

ベリルはミレアの乗る位置を思案した。

「景色をちゃんと見ていたいです」

「ミレア様がそうおっしゃるのだ」

「……」

仕方ない。ベリルは小さく溜息を漏らした。

* 凄艶の大地 - せいえんのだいち - (後書き)

凄艶・せいえんぞつとするほどあでやかなさま。

*相仕・あいし・

夕刻、鮮やかな夕日が大地を染める頃ベリルは車をゆっくりと発進させた。

「きれい」

ミレアがつぶやく。ベリルはそれに苦笑いを浮かべた。

「……」

呑気なものだ……これからが大変だというのに。小さく溜息を吐いて南に車を走らせる。

数時間後、建物が次第にぼつりぼつりと姿を消し赤い大地がほとんどを占めるようになった。

「オーストラリアのほとんどは荒れ地なんだよ」

「そうなのですか」

ミレアは少し残念そうに発したが、広大な大地に目を輝かせる。

「！道を外れるのか？」

道路から外れていく車に、アレウスは怪訝な表情を浮かべた。

「道路の通りに走るのは危険だ。ポートオーガスタまでは道を走らない」

さらに走らせると、周りは真っ暗闇になりヘッドライトの灯りだけが前方を示す。

「！」

おもむろに車が停車した。

「ひとまず今日はここまでだ」

サイドブレーキを引きながらベリルが言った。そして荷台から練炭と折りたたみのイスを3脚ほど降ろす。

そして地面に置いた練炭に少しのオイルをかけ灯を灯すと3人の顔がオレンジに染まった。ベリルは調理器具を灯の付いた練炭の上に置き、生肉をクーラーから取り出す。

「生肉が食べられるのは数日だ。じっくり味わってくれ」

しばらくすると肉の焼ける良い匂いが漂い始めた。

「あの……どこで寝るのですか？」

「車の中だ。毛布がある、それを被って寝てくれ。後部座席を使っている」

塩とこしょうをただだけの牛肉だったが、ミレアとアレウスはその味に感謝かんたんの声をあげた。焼き具合が絶妙だった。

すっかり夜も更け、ミレアは疲れたのか早々に静かな寝息を立てている。アレウスも疲れたようで助手席で寝入る。

ベリルは灯の番をしながら監視を続けていた。そして空を見上げ目を閉じる。

「……」

深呼吸を何度か繰り返し大地の力を吸収しているようにも見えた。

「あの発信器……辿られていなければいいが」

ベリルは空にささやくようにつぶやいた。

「さて、これからどうしたもんな」

自分の経験と知識でどこまでやれるのか……そして何故、狙われているのか敵の顔も見えない。何もかも解らない事だらけだ。こんな中で何をどうすれば……ベリルは考えあぐねていた。

「……ん」

ミレアが静かに目を覚ます。

「おはようございます」

「おはよう」

アレウスが挨拶を交わした。

「あ、俺は外に出ています」

「ありがとう」

ミレアが着替えるためアレウスは外に出る。

「！」

外に出るとベリルが双眼鏡で辺りを窺っていた。

「……！」

ベリルは車の前方1.5km辺りに何かを見つけた。丁度、車の鼻先にいる。ベリルは荷台に乗り、車の頭に肘を乗せて双眼鏡を固定するように再びのぞき込んだ。

「やはり辿られていたか」

苦い顔になる。いつから追尾されていたのか……おそらく街から出る前だろう。考えながらベリルはスナイパーライフルを取り出した。

「……！」

あれは武器だったのか……アレウスは荷台にあった荷物を思い出した。そしてベリルはライフルのスコープで相手を確認する。

その時――

「3人いる」

「……！」

アレウスの言葉にギョツとした。

「何故……。！」

言い終わらないうちにアレウスの目に気付いた。濃いグレーの瞳の黒い部分が縦に長く伸びていた。

「それは……」

いぶかしげに問いかけるベリルに猫目を戻し説明した。

「俺は遠くを見る事の出来る能力ちからを持っているんだ」

「……！」

『イーグル・アイ』というやつか……？

「なら有り難い。詳しく教えてくれ全員男か」

驚いている暇は無い。ベリルはずっとスコープをのぞき込む。

「ああ……草色のミリタリー服だ」

「一番近い奴はどいつだ」

「真ん中の奴が……2mほどこっちにいる」

「よし」

照準を合わせて銃弾を放った数秒後……

「！ 当たった」

アレウスが言っと、ベリルは荷台から降りて運転席に乗り込んだ。
「な、なんですか？」

後部座席で着替えを済ませていたミレアが驚いてベリルを見つめた。続けてアレウスが助手席に乗り込む。

「移動だ」

「全員やらないのか？」

「1人を撃てば警戒する。当たる場所にはいかんよ」

ベリルは言いながら車を勢いよく走らせた。

「これで相手の動きが少しは読める」

アレウスたちは自分たちが誰に、どの組織に狙われているのかを知らない。

本来なら捕まえて吐かせたい処だが…… まともに接触するのは今は避けた方がよさそうだ。傭兵として闘ってきた経験と勘から、ベリルはそう感じた。

「……」

本当に荒れ地ばかりだな。アレウスは窓から見える景色に眉をひそめた。

「付けているか？」

「ん……」

ベリルの問いかけに、アレウスは窓を開けて後ろを見る。

「1kmくらい後ろから」

「そうか」

不安そうにしているミレアをベリルはバックミラー越しに見やる。暗くなるまで走り続け真っ暗になる前に野営の準備をして眠りに就く。敵は相変わらず1kmと一定の距離を保ちベリルたちを監視していた。

暗視スコープでそれを確認するベリル。

「……………」
昼間に1人撃ち殺し、2人に減った訳だが……さて、どうやって補充する気か。

翌朝——監視と防衛のため、敵に鼻先を向け双眼鏡をのぞき込むベリルの耳に微かに音が聞こえる。

「……………」
この音は……

「！」
ヘリのローター音が！
「アレウス！」

横にいたアレウスに上空を示す。それを見てアレウスは遙か彼方の空を見つめた。

「ヘリ……………」
「チツ厄介な」
ベリルは小さく舌打ちをするとトラックの荷台に飛び乗り、その中から長い武器を取り出した。

ドン！ と乱暴に二脚を車の頭に据えてスコープをのぞき込む。
「……………」

こいつ……とんでもない武器を持ってやがる。アレウスは、目の前にどつかりと横たわる武器を見て言葉を詰まらせた。

全長1m40cmを越える対物狙撃銃、バレットM82だ。アンチマテリアルライフル軽装甲車両やヘリコプターを撃つためのライフルで重量は12kgを優に超える。

アレウスは自分の仕事だとばかりにヘリを目で追った。

「！ こっちに来るぞ」
「ヘリで攻撃するつもりだろう」
ベリルはスコープを覗きながら口を開いた。

「！」
その言葉に、アレウスはヘリの中にいる人間を見た。

「……ライフルを持ってる」

「私とお前だけを狙うつもりだ」

あとは威嚇^{いかく}用にマシンガンだな。つぶやくように言ったベリルの言葉でアレウスはヘリに装備されているマシンガンに気付いた。

「……」

ベリルはスコープで敵のヘリに照準を合わせる。

「もう少し……」

ペロリと唇を一度舐めると引鉄^{ひきがね}を引いた。約1kmの距離ならおよそ2秒で弾丸は到達する。50口径（12・7ミリ）弾ならではの到達速度だ。

「！ 当たった」

「乗れ」

煙をあげながら落ちていくヘリを確認してベリルたちは車に乗り込んだ。

「次は何で来るかな^{なに}」

「……」

彼が半ば楽しんでいるように感じられて、アレウスは眉をひそめた。

「！」

アレウスは後部座席で小さくなっているミレアに気付く。

「大丈夫ですか……ミレア様」

「だ、大丈夫。です……」

*相仕・あいし・（後書き）

相仕・^{あいし}ともに組んで事をする者。仲間。相棒。

＊盛拳の胎動・せいきよのたいどう・

「この男は……？」

豪華な玉座に腰を落とした40代ほどの男が、目の前の大きなディスプレイに映し出された青年に眉をひそめる。大理石で造られた中世の王の間を思わせる部屋だ。

「は。名はベリル・レジデントと申します」

「こやつが我の邪魔をしているのか」

答えた部下と見られる男に目も向けず、片肘を突きその手に頭を乗せディスプレイのベリルを睨み付けた。

「どういった者なのだ」

「はい。どうやら、傭兵のようです」

その言葉に男はピクリと反応した。

「……傭兵？」

金色の目をつり上げる。質素な色合いだが、高価だと思わせる生地を使った優雅な服に身を包み玉座の男は部下の男に語気を荒げた。

「たった1人の傭兵ごときに貴様たちは何をしている！」

「も、申し訳ございません……っ」

男の怒りに萎縮する。

「何故こんな傭兵ごときに……」

「この男について調べました」

部下の言葉に耳を傾ける。

「年は25歳。その類い希なる戦闘センスから『素晴らしき傭兵』と仲間たちの間では呼ばれているそうです」

「ほう……」

ぴくりと片眉が上がる。

「それが失敗の理由だと言っのか？」

「それは……」

男の目に体が強ばった。

「まあいい。次は失敗するな」

「は、はい。ではセラネア様、失礼いたします」
ホッと一礼し、部屋をあとにした。

「……」

セラネアは1人考え込む。背中までの漆黒の髪を乱暴に流し、金色の瞳で宙を睨み付けた。

「我の偉大なる計画を邪魔する者は、何人たりとも捨て置けぬ」
冷たい声でつぶやく。

ベリルたちは3日目の野営を始めた。ダーウィンからアデレードまではおよそ2900km。北から南、まさに端から端に縦断する形だ。

オーストラリアの街は海岸近くにある。それ以外は国立公園だったり荒れ地だったり、人の住んでいる場所は半分も無い。

パチパチとたき火の音が真っ暗な空に響く。

「！」

炎の番をしているベリルにミレアが静かに近寄った。

「眠れないのかね？」

「……はい」

アレウスは車の荷台で星空を見上げている。

「……」

少し躊躇して、ミレアはベリルの隣に腰掛けた。イス代わりの倒木だ。

「……」

ミレアは、しばらく暖かな炎を見つめる。

「実は……」

「！」

「出てから、よく眠れてはいないのです」

「そうか」

捕まる恐怖から、ミレアはまともに眠れないでいた。

「……」

炎の色に染まるベリルの横顔を見つめる。

「あなたは……不思議な人です」

「そうかね？」

ベリルは肩をすくめた。

「兵士……なのでしょう？　なのに、あなたからはそれを感じません」

「……」

見つめられてベリルも見つめ返す。エメラルドの瞳が、炎の中にあってその輝きをなくさない。落ち着き払った表情は『何も心配する事はないのだ』と彼女に語りかけているようだった。

「あの……あなたの横で、寝てもいいでしょうか？」

「！」

「あなたの側にいると……とても落ち着くのです」

ベリルは何も言わず首をクイと傾けて了解した。

「！　ありがとう」

ミレアはベリルに近寄ると、毛布にくるまり彼の右側にもたれかかって目を閉じた。しばらくすると彼女から静かな寝息が聞こえてきた。

今までの疲れから彼女はすぐに眠りに就いたようだ。その様子をベリルはじつと見つめる。

「……」

彼女に一体、何があるのだろうか。こうまでして彼女を狙う理由とは何だ？

「余計な詮索せんさくは無用だ」

「！」

空を見ていたアレウスが言いながら近づく。動けないベリルは目だけアレウスに少し動かし、小さく笑った。

「人の心も読めるのか？」

「いいや。大体お前の考えている事は解る」

そう言つてベリルの後ろで立ち止まる。

「ミレア様はまだ17歳だ」

「！」

「本来なら、外に出た仲間の処に一度身を預け世界を知る。俺もそうだった。だが……ミレア様はそれが出来ない」

「彼女の地位のためか？」

アレウスは無言で頷いた。

「ミレア様は我らを統率する者の血筋だ。それを護るのが俺の一族だから俺は数年、外の世界を知ったあと戻つてミレア様に世界をお教えした」

「なるほど。それでお前たちに違和感が無かつた訳か」

そんなベリルの背中を見つめたアレウスはつぶやくように発する。

「正直、お前がいて助かつた」

「！」

「俺はこの土地を知らない。必死でミレア様を追いかけたが、俺だけではどうする事も出来なかつただろう」

彼から意外な言葉が出てベリルは苦笑いした。あれほどベリルを警戒していたのに、この変わり様は……？

それはミレアの態度にあつた。なんの警戒心も示さず、安心しきつた顔で眠っている。それを見てはギスギスしている自分がなんだか大人げないようにも思えたのだ。

朝――

「……ん」

ミレアは目を覚ます。

「！」

「おはよう」

ベリルにもたれかかっている自分に驚いた。

「お、おはようございます」

ベリルは目覚めたミレアを確認するように見つめると、立ち上が

って移動の準備を始めた。

「……」

あれからずっと側にいてくれたのかしら。一晩中、体を預けさせてくれたのかと思うとなんだか悪い気がした。

ミレアはトタタ……と、彼に駆け寄る。

「すみません」

「ん……？」

意味の解らないベリルはキョトンとした。

* 盛拳の胎動・せいきよのたいどう・（後書き）

盛拳：せいきよ
盛大な事業。雄大な計画。
胎動：たいどう
（2）内面の新しい動き。

* 頸兵・けいへい・

ベリルはアレウスに運転を任せ、助手席で武器の手入れを始めた。
「……」

それを後部座席で興味津々に眺めるミレア。

「銃とは色んな部品で出来ているのですね……」

「常に精度を良くしておかんな」

手入れを終えて組み立てた銃を腰の後ろに仕舞う。彼の愛用銃は P226 だ、威力があるハンドガンではないが使いやすさと丁寧に造られているため信頼性が高い。

「このカーナビの通りに走っていいのか？」
不安になったアレウスが問いかけた。

「そうだ。私が入力した経路だから道に沿っているものではない」
そう言って座り直し、背もたれを少し傾ける。

「少し眠る」

目を閉じて腕を組んだ。

「え？」

「なんでだ」

「奴らが次に来るのは深夜だと思われる」

ベリルは目を閉じながら答えた。

*** 頸兵 - けいへい - (後書き)**

頸兵：^{けいへい}
(1) 強い兵。
(2) 強い武器。

* 気炎・きえん *

その夜——ミレアとアレウスは早くに車の中で眠りに就き、ベリルは炎の番をしながらウトウトしていた。

遠くから足音を潜めて数人がベリルに近付いてくる。その手にはサイレンサーハンドガン消音器を取り付けた拳銃。男たち5人はいずれも武装していた。

「……」

暗視スコープを装着した顔でベリルを取り囲み見つめている。

ふいに——「本気で寝ているとは思っていないだろう？」薄笑いでベリルが目を開き応えた。

「!？」

ガシャガシャ! と一斉に銃口を向ける。それにベリルは喉の奥から笑い声を絞り出した。

「クツクツ……そう構えるなよ」

前の男に目を合わせ不敵な笑みを浮かべる。

「そうキリキリするな。それでは視野が狭まるぞ」

「!？」

数人がベリルの手にあるものに気が付いた。

「せん——っ!？」

最後まで言い終わらないうちにまばゆい光に包まれた。

「うおお!？」

「うわっ」

強烈な光に男たちは一斉に目を押える。手榴弾型の閃光弾だ。暗視スコープを装着していた目には痛いほどの衝撃が走ったことだろう。しばらく目は開けない。

閃光弾を使用した本人は当然、目を閉じていた。

「くそっ!」

焦った男の1人がハンドガンの引鉄を引く。ひきがね

「バカッ騒ぐな! 車の中の奴も気が付くじゃないか!」

「閃光弾の時点で気が付くと思うがね」

「!？」

ベリルは叫んだ男の背後に回り込み、静かにナイフを突き立てる。

「が……あ……」

「なんだ！？ 何が起こってる!？」

目の見えない男たちは暗闇の中で放たれる存在感にあわてふためた。視力が回復するまでの間に残り4人を倒さなければならぬ。ベリルは静かに素早く1人1人に駆け寄り、のど元や背中にナイフを突き立てていった。

「ぐ……あ……」

最後の1人が生命活動を止め、地面に倒れ込み静寂が訪れる。数秒ほどそれを見つめていたベリルだが、何かに気づいたように元の顔に戻る。

「しまった、1人くらい残しておけばよかった」

言って頭をぽりぽりとかいた。

「ん……」

それからベリルは、死体からごそごそと何かを漁^{あさ}りだした。暗視スコップはもちろん、持っていた武器を一切^{いっさいがっさい}合切り外すとまとめて荷台にポイと投げ入れる。

「……お前は追いはぎか」

アレウスが呆れて見つめる。

「ミレアは？」

「外には出ないようにと言ってる」

こんなシーン見せられるか……アレウスはミレアを出さなかった事は正解だったと胸をなで下ろした。

それに死体を見せるのも避けたかった。きっとショックを受ける。己のために流される血と、人を殺すベリルを見て悲しまないはずはない。

ミレアはまだ17歳の少女なのだから……

朝——ベリルは車を走らせながら思索していた。

「……」

これ以上は単独での戦闘は少々、無理がある。相手もこちらの行動に対応出来る頃合いだろう。

「さて、どうしたものか……」

ベリルは携帯を取り出し、車のカーナビにある中央のくぼみに開いて差し込んだ。

「？」

助手席のミレアと後部座席のアレウスは見慣れない行動に怪訝な表情を浮かべる。

「ジェイク」

ベリルが発すると、携帯がどこかにつながり相手呼び出すメロディが流れた。

「！？」

「音声認識だよ」

2人の驚きにベリルは笑いながら応える。

<おう、ベリルか。どうした>

「ちよつと頼まれてくれないか」

<はずんでくれるんだろうな>

「前金で2万オーストラリアドル」

それにジェイクは口笛を鳴らした。

<よほどの相手か？>

「あと15人集めてくれ。また後で連絡する」

<了解>

「今のは……？」

アレウスが問いかける。

「これ以上は単独では無理だ。相手もそろそろ本気を出してくる」

私の事も調べている頃だろうしね。ベリルは小さく笑った。

「何かあるのか？」

「5年ほど前から通り名が付いた」

「通り名……ですか？」

首をかしげているミレアに軽く説明する。

「通り名が付くと色々とメリットやリスクが増えるものなんだよ」

「メリットは？」とアレウス。

「仕事が増える」

「ではリスクとは？」ミレアが尋ねる。

ベリルは肩をすくめた。

「あれこれとデータが造られる。愛用の武器とか、動きの特徴とかね」

*** 気炎・きえん・（後書き）**

気炎・きえん燃え上がるような盛んな意気。

＊掩撃・えんげき・

その夜――

「ジェイク。どうだ？ ……そうか」

ベリルはジェイクと電話を交わす。

「では頼む。ポイントは――」

車の中で電話をしているベリルの影を見ながら、炎で暖を取るミレアとアレウス。

「そういえば。どんな通り名か聞いてませんわね」

「どうせロクなもんじゃありませんよ」

「ロクなものじゃなくて悪かったね」

「あつ……電話は終わりましたの？」

戻ってきたベリルは練炭をくべる。

「仲間が必要なのか？」

アレウスはベリルを見て問いかけた。あまり多くの人と関わる事は避けたいのだろう。それにベリルは肩をすくめる。

「今、囲まれてもおかしくは無いんだぞ。私とお前だけでどうにかなると思うなら言ってみろ」

「……」

アレウスは何も言えなかった。

とある場所――荒野に飛行機の音が響く。大型輸送機が低空で飛行し速度をゆるめて着陸した。

後ろのハッチが開き武装した男たちやジープ、ホロを付けたトラックが何台も降りてくる。輸送機は全て降りた事を確認すると静かに離陸した。

「よし！ 準備にとりかかれ」

1人の大柄な男が言くと15人ほどの男たちは一斉にジープやトラックに地面と同じ色をした布をかけていく。そのうちの数人が地

面に穴を掘る。

「急げよ」

男はそう言つて小さく笑い北を向いた。

「ベリル・レジデント……？」

1人の男が紙切れを見ながら通路を歩いていた。まるで病院や研究所を思わせる造りの建物だ。その男は背中までの金髪を後ろで束ね吊り上がった青い瞳を細める。

「ふん」

180cmの細身の体を揺らし男はおもむろに部屋に入った。そこはデータ室のようだ、いくつものサーバとコンピュータが並べられている。

「！これはキリア様。もうお仕事は終わったのですか？」

部屋にいた白衣の男が問いかけた。

「うん無事にね。10人ほど殺してきたよ」

言いながらイスに腰掛ける。

「何を見ているのですか？」

「ん、次のターゲット。かな」

足を組んで紙切れを眺めディスプレイの電源を付けた。

「どうも厄介な奴らしくて、セラネア様から直々（じきじき）にお達しがあった」

「！ボスから……ですか」

「えー……と？ 25歳で傭兵。記録にあるのは15歳くらいからだな、20歳の時に大きな作戦で成功して『素晴らしき傭兵』と通り名が付いた。」

組んだ足をプラプラしてキーを適当に打つ。

「よしと。10歳くらいから調べていこう。マイク、15年前のハッキングデータを出してくれ」

「解りました」

白衣を着たひよる長い男は、言われたデータをキリアの前にある

ディスプレイに映し出す。この組織は各国の情報や機密データを少しずつ盗みだし集めている。

「！ 変だな……何も出てこないぞ」

「え、そんなハズは……」

キーワード検索出来るようにプログラムされているデータの中に、ベリルのデータが一切出てこない。

「??」

キリアは首をかしげた。こんな事は初めてだ。

「15歳でいきなり名前が出てきた……?」

その前はどこにいたんだ? いきなり15歳で湧く訳がない。

「……こいつ、何かあるのか?」

このキリアという男、組織のトップに位置する兵士だ。年は27歳。その戦闘センスは抜群で魅力的な顔立ちをしている。

彼はターゲットとなる場所や人物を自分で調べ、戦い方を考える。心の底から戦いと殺しを楽しんでいる。そういう人間だ。

「しかしこいつ……結構な男前じゃないか」

ディスプレイに映し出されたベリルの顔を見てニヤリとする。苦しみに歪む顔はさぞ見ものだな。

「ククク……」

喉の奥から絞り出すように笑った。

「今が25歳なら、生まれた年には何があった?」

キリアは25年前の出来事を手当たり次第に検索し始めた。

「お……? なんだこれは。A国……?」

A国——正式名称はアルカヴァリユシア・ルセタ。ヨーロッパにある小国だ。森林が多く、その街並みはイタリアとよく似ている。

その森の中に建てられていたらしい遺伝子操作研究所にキリアの目が留まった。

「国家機密プロジェクトか。これは関係ない、な……?」

いや、待てよ……?

「設立は40年前。25年前に実験が成功? その10年後に研究

所が何者かに襲撃を受けて実験体は死亡……？」

これは偶然の一致か？ 奴が生まれた年に実験が成功し、15歳の時に施設が襲撃されている。

「何の成功なんだ？」

乱雑に並べられているデータを必死で目で追う。実験体の死亡により途中で頓挫した研究のデータをまとめる気などA国は無かつたのだらう。

「！ こいつは驚いた……」

キリアは探し当てたデータに驚嘆した。

「これが本当だとしたら、とんでもない実験だぞ」

ほぼ現存する全ての人種のヒトDNAを分裂・合成・結合して造り出された『完全なる人工生命体』。

「……」

キリアはベリルのデータが書かれた紙切れとディスプレイを交互に見やる。

「……いくらなんでも飛躍しすぎか」

こいつが生まれた同じ年に実験が成功してるからって、こいつがそうだとはい到底思えない。それに『実験体は死亡』と書かれているじゃないか。

「！ いや、待てよ」

機密を漏らさないために、あえて『死亡』としていたら……？
あり得ない事じゃない。国の保身のために当然の処置だといえる。

「実験No.6666。俗称キメラ……か」

キリアはディスプレイを眺めてあごをさすった。その目には狂気にも似た喜びが浮かんでいる。そしてちらりとマイクを見やった。

「……」

この事はまだ伏せておく事にしよう。さすがに言えるほどの確証も無い。

「！ そうだ。マイク、こないだこいつを撮った動画を見せてくれ」
「動画といってもほとんど無いよ……すぐに落とされたからね」

遠くのデスクからマイクが声を張り上げる。クリアのディスプレイに上空から地上を見下ろした画像が映し出された。

先日ベリルたちを襲ったヘリの映像だ。

「！ うわっ ホントにすぐ撃墜げきついされてる」
情けないな」

「また部隊を差し向けるらしいよ」

「！ へえ」

俺の出る幕あるかね。それとも返り討ちに遭うかな？ それならそれで俺が奴と闘う時のデータが採れていいけど。

仲間の安否などこの組織の人間が気にかけるハズもない。そんな組織だ。

「『素晴らしき傭兵』の名が伊達じゃなければいいんだけど……ね」
片肘を突き、そこにニヤけた頭を乗せてベリルのデータを見つめる。1人で部隊を相手に出来る訳が無い。さて、どう出る？ ベリル……

「こっちの動きをどれだけ読んでもか。だな」

夜襲は失敗したようだし。なかなか楽しませてくれそうだ。

「！」

車を走らせているベリルの耳に聞き慣れた音が響く。

「アレウス、外を見てくれ」

「ん？」

この音は……

「うっ！？」

アレウスは驚いて窓を勢いよく開いた。

「飛行機だぞ！」

目を細めて詳細を計るアレウス。その耳に別の音。

「本気を出してきたな」

前からも飛行機がせまってきた。ベリルは目を細めてぼそりと発した。

「取り囲むつもりだ」

「どうするんだ!？」

ベリルはしばらく走らせて車を停車させる。飛行機からいくつものパラシュートが降りてくるのが見えた。

「お前たちは中にいる。出るなよ」

言つて、ベリルは車のドアを開いて外に出た。そんなベリルの足下に何発もの銃弾が浴びせられる。先に接近した男が威嚇いかくのために放ったものだ。

見る間に10人の武装した男たちに囲まれた。警戒してか、5mほどの距離を置いている。

「……」

ライフルやマシンガンを持っている男たちを一瞥し、ベリルは目を据わらせて薄笑いを浮かべ肩まで手を挙げた。

「……」

男たちはベリルの動きに警戒しながら見つめる。

「たった1人の人間にそこまで警戒する事もなかるう」

溜息混じりに口を開いた。そんな言葉にも武装した男たちはベリルに険しく銃口を突きつける。青年はそれに恐れる事もなくニヤリと笑った。

「!？」

その顔にギョツとする。

「もう少し気配を読んだ方がいいぞ」

「!！」

「うつ!？」

「! な……っ」

突然、近くの地面が盛り上がりそこから武装した人間が何人も出てきた。

「……!」

一斉に向けられる銃口。どう見ても数で負けている。

「武器を捨てな」

ハンドガンを手に行っている大柄な男はその銃口を向けながら静かに発した。

「……」

男たちはうなだれて銃を投げ捨てるしかなかった。

*** 掩撃 - えんげき - (後書き)**

掩撃^{えんげき}：小部隊で敵の不意に乗じて襲い撃つこと。ふいつち。掩襲。

* キリア

「ベリル！」

男がベリルに笑顔で挨拶を交わした。

「ジェイクよくやってくれた」

「！ ジェイクって……」

アレウスは男を見つめた。ガタイの良い30歳ほどの男。無精髭ぶしょうひげを蓄えたくわブラウンの髪はバサバサだ。彫りの深い顔立ちに青い目が小さくも見える。

「ここら辺りで襲われると思ったのでね。彼らに待機してもらっていた」

「ベリルの読みが当たったな」

お互いの拳を軽く当てて成功の合図を交わす。敵の男たちは武器を全て奪い手足を拘束した。

「こいつらどうする？」

その男たちを見下ろしジェイクが問いかける。

「ふむ……」

ベリルは縛られている男たちをしばらく見つめて1人の男の前にしゃがみ込んだ。

* 戦略

その男の目を見据える。この部隊のリーダーだと窺^{うかが}えた。

「組織の名は？」

「……」

ベリルの質問に目線を外す。

「何故、彼女を狙う」

「……」

聞こえない振りをして沈黙した。

「少し痛い目を見ないと吐かないんじゃないか？」

仲間の1人がそう言って1歩前に出る。ベリルはそれを手を挙げて制止した。そして黙り込んだ男にニコリと笑いかける。

「組織の名はまた後で聞くとして。彼女についてだが……」

「……」

一瞬、こちらに目を向けた男に薄笑いで発した。

「お前たち、ただ捕えろと命令されただけでその理由は聞かされてはいまい」

「！」

驚きの表情を見せた男。ベリルはそれを確認して立ち上がった。

「どうしてそうだと思ったんだ？」

ジェイクの質問にベリルは小さく笑う。

「組織の下っ端などそういうものだろう」

「使い捨てか」

納得したようにつぶやく。

「……」

ベリルはピックアップトラックの荷台近くでこちらを窺っているミレアを見つめた。彼女が何を持っているのか解らないが、組織自体に関係しているものでは無いらしい。

ではなんだ……？

「組織の上の人間が彼女を必要としている？」

ベリルはぼそりとつぶやいた。果たして、彼女が持っている秘密を知るのは組織の何人なのだろうか……ベリルはそれが気になった。ごくわずかだとすれば、組織内の人間に彼女を狙う理由を探られる前に事を急ぐ可能性もある。

「それがこちらに吉と出るか凶と出るか。だな」

ひとまず移動を始める事にしたベリルたちは、岩に見せかけていたジープに各々が乗り込みベリルの車の後ろを追いかける。

「心強いですね」

ミレアが後ろを向いて微笑んだ。

「一癖^{ひとくせ}も二癖^{ふたくせ}もある奴らだが腕は確かだ」

ベリルが薄笑いで応える。捕えた敵はすっかり仲間たちのジープに詰め込んでいる。まだまだ聞きたいことが山ほどあるのだ。

「このまま攻防戦を続けるのはこちらに不利だな」

相手の組織は大きいと予想しているベリルは苦い顔をした。相手は本気を見せて来たがまだ精鋭^{せいえい}を使ってはいない。

こちらのデータを集めたうえで仕掛けてくるのだろうか……？

「こちらは何の情報も得られていない」

この状態では『探し屋』と呼ばれる情報収集の専門家にも要請が出来ない。ベリルは図りかねていた。

「失敗した？」

キリアは嬉しそうに報告を聞く。これは予想より早く俺の番が回ってきたそうだ。組織のボスであるセラネアは相当、怒ってるだろうが俺にはどうでもいい事だ。

自分が失敗した訳でもなし。むしろ失敗してくれた事は喜ばしいね。相手も戦力を増やしたようだが、こちらに比べれば補給だつてままならないはずだ。

「俺とお前、どっちの戦略が上かな？」

口の端をつり上げる。キリアという男は単独で行動するだけではない。大勢を指揮し、その能力を発揮してきた。

「ククク……早く俺の番が来ないかな」

薄暗い自分の部屋で、喉の奥から笑いを絞り出す。自分と同じ臭いをかぎ取ったキリアはベリルに会える時を待ちわびていた。

「うーい、そのテーブルこっちに置いてくれ」

ベリルたちは暗くなって野営の準備を始めた。

「食料もたっぷり持ってきた。存分に食べてくれ」

ジェイクはミレアとアレウスに笑ってアルミの皿を手渡した。

「ありがとう」

ニコリと笑ってテーブルに向かうミレアの背中にジェイクは口元が緩む。

「可愛いな」

「少女趣味か？」

ベリルがしれっと応えた。

「……」

35歳のジェイクは無言になる。テーブルに腰掛けて食事をするミレアの周りには男たちが笑顔で集まっていた。その光景にアレウスはピリピリと神経を尖らせる。

「本当に信用出来るんだろうな……」

気が気じゃなくてミレアをじっと見つめるアレウスにベリルは小さく笑った。

「皆、私の顔見知りだよ。知らない相手がいれば今は私も警戒しただろう」

「！」

ベリルは素直に今の考えをアレウスに語った。敵の姿がまるで見えない。その状況で知らない相手を仲間に加える事はベリル自身、避けたい事のような。

その飄々（ひょうひょう）とした顔の裏には、アレウスには計り

知れない意思が働いているようだった。

「ベリルの通り名とはなんだ？」

通りすがりの傭兵にぼそりと訊いてみた。

「ん？ 『素晴らしき傭兵』だよ」

「……素晴らしき……傭兵」

25歳という若さでそう呼ばれるだけの戦闘センスをベリルは持っている。ミレアが言ったように彼に出会った事は幸運だったのかもしれない。

それが本当に幸運だったのか……その結論を出すのはまだ早すぎる。

アレウスは屈強な男たちの中にあって小柄ながらも一際、存在感を放っているベリルに目を細めた。

朝——移動準備に傭兵たちは追われていた。

「ジェイク」

「おう、ベリルか」

ベリルはジェイクに1枚の紙切れを手渡す。

「10人リストアップした。要請を頼む」

「交代要員か……しかしよベリル」

ジェイクはリストを一瞥し、仲間たちに挨拶を交わしているミレアを遠目で見やる。

「そこまでしてあの子を護る意味ってあるのか？」

「……」

それにベリルもミレアを見つめる。総勢20名以上の報酬をベリルは最終的に支払う事になる。ジェイク以外は1人1万オーストラリアドルだとしても、それ以外の経費もバカにならない。（作中のレート：1オーストラリアドル＝95円）

彼女からの報酬など、はなからベリルは見込んではいないのだ。

「乗りかかった船だ。途中下船は出来ない」

笑いながら肩をすくませる。ジェイクはそれに口の端をつり上げ

た。

「お前らしいけどね」

「金は使って初めて価値がある」

「だったら彼女くらい作れよ。ガンガン金使えるぜ」

冗談混じりに言ったベリルをジェイクは右肘で軽くこづいた。それに苦笑いで応えるベリル。

「遠慮しておく」

言いながら移動準備を手伝うために遠ざかる。

「カタブツめ」

その顔立ちならいくらでも女は寄ってくるだろうに。ジェイクはベリルを見て溜息を吐き出す。

「女に興味無いなんて勿体ねえなあ」

ベリルは色恋沙汰にはまるで興味が無い。中にはそういう奴もいたが、あの若さでだとは……ジェイクは驚きを隠せない。

「あの子も可愛いと思うんだけどね」

ミレアを見やる。

「年は結構離れてるけどよ。俺に比べれば許容範囲だと思うが」

あの赤毛が可愛いじゃないか。大人になったらさぞかし美人になるぞ。ベリルを慕っているようだし。

「……」

ここまで考えてジェイクはふと我に返った。

「俺のガキでもあるまいし……」

なんだってあいつの恋愛を気にかけてやらなきゃいかんだ。

「ま、仕方ないか」

それだけあいつが可愛いって事だろうな。ジェイクはベリルを弟のように思っていた。ベリルの持つ雰囲気は不思議だ。初めて会う人間は彼のエメラルドの瞳に一瞬、吞まれる。

どんな生き方をしてきたのだろうか……あそこまでの存在感はそうあるものじゃない。落ち着き払った雰囲気と上品な物腰、そしてその独特の口調。誰もが彼の生い立ちに疑問を持つ。

しかし彼ら傭兵の間では触れてはならない領域なのだろうか、問
いかける者はほとんどいない。それだけ過去に何かしらの傷を持つ
者が多いということなのだろう。

彼は誰にも増して己の命を重きに置く事はなく。自身の限界を引
きだそうとしているのか、はたまた己を犠牲にしたいのか……それ
はまるで――

「まるで死にたがっているようも……見える」
ジェイクはぼそりと宙につぶやいた。

* サファイアの誘惑

「これは最高だ！」

キリアは監視している人間が撮影した映像に高笑いを発した。バンバンとデスクを叩きヒーヒー笑っている。

「ま、まんまと誘導されてるじゃないか」

こっちの仲間まで捕えられて完璧に動きを読まれている。

「……」

その光景にマイクは眉をひそめた。キリアは監視カメラの映像をデータ室で確認している最中だ。

夜襲の時の暗視カメラでの映像も確認したキリアだが、ますますベリルに会いたくて仕方がなかった。

「……ちよつとだけ挨拶しちゃうかな」

「え？」

聞き返したマイクにキリアは笑っただけだった。

<さすがに相手さんも思案してるようだな>

「どうだろうか。戦術の変更を考えているのかもしれない」

ベリルたちは車を走らせながらヘッドセットで会話を交わす。スピーカーから会話は聞こえるためミレアたちも聞く事が出来た。ここ2日、敵が攻撃してくる気配は無かった。

<このまま街に入るのはどう考える？>

「あまり得策とはいえないな」

街に入れば相手は大きな動きが取りづらくなると同時に、こちら也大勢での行動が出来なくなる。

<一長一短か。じゃあ街の近くでキャンプを張るのはどうだ？>

「それも考えていた」

知らない人間が行き交う街より仲間同士でいる方が格段に安全だ。<とりあえず、今日はここらでキャンプ張ろうぜ>

ジェイクは提案して通話を切った。

その深夜――

「……？」

ベリルは寝付けずに車から出て星空を仰ぐ。寝付けない時は決ま
って何かある……彼の持つ闘いのセンスなのか、きわめて勘がよい
だけなのか。監視している仲間たちに軽く手を挙げて挨拶を交わす
と思案するために1人キャンプから少し離れた。

近くには小さな森がある。森といっても木が数十本生えているだ
けの雑木林と呼ぶにもおこがましい程度だ。

「……」

微かに虫の声が耳に届く。

「ホントに勘がいいねえ」

「！？」

森の中から現れた人影。ニコニコと笑っているがその殺気にベリ
ルは構えた。

「俺はキリア。以後、お見知りおきを」

丁寧に腰から曲げて挨拶をした。

「どういっつもりだ？」

眉をひそめるベリルにキリアはニヤリと笑った。

「！」

その瞬間ゾクリと背筋に冷たいものが走る。視線を外さないベリ
ルにキリアは嬉しそうに口を開いた。

「やっぱり勿体ないねえ、そのセンス。どうして殺しをしない？」

「なんの事だ」

「とぼけちゃって」

キリアは肩をすくめてベリルに言い放つ。

「人を殺した時の感覚。好きだろ？」

「……」

ベリルは何も応えずにキリアを見つめた。

「否定も肯定もしないんだな」

「どうせどちらの答えもお前を喜ばせるだけだろう」

「さっすが！ よく解ったね」

キリアは指をパチンと鳴らしてベリルを指した。

「でも……これを聞いたらきつとあんたは俺に従うようになるよ」

ニヤけた顔でそう言つとサフィアのような瞳を輝かせ、ゆっくりと問いかける。

「ミッシング・ジエム……って知ってる？」

「！」

ベリルはギクリとして体を少し強ばらせた。

「人類の中にあつて、人類の歴史の中には無い方がいい存在。の事だつてね」

「……それがどうした」

「あつれー？ またとぼけるんだ」

キリアはさらに嬉しそうに笑みを浮かべた。

「ここまで言つて、とぼけても意味が無い事は解ってるんじゃないの？」

キリアはベリルを見据えると声のトーンを下げ口角を吊り上げて口を開く。そこから紡つむがれる言葉はベリルを硬直させた。

「No.6666。俗称キメラ」

「……っ」

ベリルの手が震える。平静を装おうと必死に手を押えた。

「今の処それを知ってるのは俺だけだ。俺の下僕になると約束するなら、そのデータは綺麗さっぱり消してあげるよ」

キリアはすつと右手を差し出した。

「……」

ベリルは黙つてその手を見つめる。

「どうした？ 俺がお前を認めたからこんな交渉してやるんだぜ。でなきゃお前なんて殺してる」

早くしろと言つように喉の奥で舌打ちをしてベリルを促した。

「……好きにするがいい」

「！ 何……？」

予想外の言葉にキリアは一瞬、驚いて右足を踏みしめる。ベリルはそんなキリアをギロリと睨み付け左手をさらりと流してその意思を示した。

「私は誰にも従わない。ましてや殺しを楽しんでいる者になど」

「……」

キリアはそんなベリルをしばらく見つめたあと不敵に笑った。

「……言ってくれるね。『作り物』のくせに！」

「うつ！？」

ベリルは向かってくるナイフをかるうじてかわす。キリアはその間に森に身を隠した。そして声だけがベリルの耳に響いた。

「いいか……『つぎはぎ』のくせに舐めた事言っくんじゃねえよ。次

に会った時、同じ事が言えるのか見ものだな……」

「……」

*それは理想か幻想か

キリアの気配が消えベリルは深い溜息を吐き出す。震えを押さえ
ていた手をゆっくりと離れた。

「そろそろ……終わリかな」

目を細めて小さく笑った。その時――

「!？」

地面がこすれる音に驚いて振り返る。今頃、後ろに別の気配があ
った事に気付いた。そこには、両手で口を覆いベリルを見つめてい
るミレアの姿。

「聞いていたのか」

「ベリル……あなたは……っ」

驚きを隠せないミレアの目にも、ベリルは動じずにただ彼女を見
つめていた。

*作り物

「！ まっ、待ってください……！」

キャンプに戻ろうとしたベリルをミレアは呼び止める。静かに振り向くベリルの表情は硬い。

「あなたの事を……教えてください」

「知ってどうする」

無表情なベリルの目にもミレアは動かずにしつかりと見据えた。

「……」

諦めたようにベリルは小さく溜息を漏らし、近くにあった倒木に腰を下ろす。ミレアも駆け寄りその隣に座った。

ベリルの顔をのぞき込むと、話す事柄を慎重に選んでいるようだった。

「何から聞きたい」

足を組みその上に右肘を乗せ目を合わせずに問いかけた。

「……」

ベリルの言葉にミレアは少し顔を伏せる。そして決心したように顔を上げるとキリリと目を吊り上げた。

「……あの人が『キメラ』と言っていましたか、どういう意味なのですか」

「そのままだよ。私は人間ではない『つぎはぎ』の生き物だ」

「！」

その言葉にミレアは胸を詰まらせる。それを一瞥いちへつしたベリルは一度、目を閉じて小さく笑った。

「意地悪い言い方をしたな。すまない」

そして満天の星空を仰いだ。息を深めに吸い込み発する。

「私の親は10人の科学者だ」

「！」

「A国、国家機密クラス遺伝子操作研究所。そこが私の生まれた場

所だ」

心を落ち着かせるように数秒、目を閉じた。

「そこで行われていた研究は『ヒトDNAを使い、人間の胎内を介さずに人工的に人を作り出す事』」

ベリルは一端、言葉を切り深呼吸する。

「科学者たちはその当時に集められるだけの人種のヒトDNAを集め、それを分裂・合成・結合させ人工生命体を造り出した。私はその唯一の成功例だ」

「!？」

ベリルから発せられた言葉にミレアは驚愕^{きょうがく}した。

「それ以降は成功しなかったようだが、上の人間は大いに喜んだ事だろう」

「……あなたは、いつそれを」

「3歳の時かな」

ベリルは笑って応えた。

「!」

そんな……! たった3歳の子どもに真実を述べるなんて!

「それからは勉強の毎日だった。色んな専門家が私に色々と学ばせてね。私はそれが苦痛では無かったよ」

「……だから、そのような物腰なのですね」

「ん? ああ……マナーも教わったかな」

ベリルは目を細めて小さく笑うと話を続ける。

「毎年、国から視察が来ていたが私はほぼ人間扱いされる事はなかった」

「! そんなっ」

「1人の視察には『パッチワーク』と呼ばれていた」

それにミレアは両手で口を塞いだ。目を潤ませて肩が震える。

「酷い……」

「数日滞在して帰って行くだけなのでさして辛くもなかったよ。間違った表現でもないしね」

「いいえ！ そんな言い方はあんまりです」

さして気にも留めていない言い方をしたベリルに、ミレアは声を震わせた。ベリルはそれに少し困った顔をする。そして彼女を元気づけるように付け加えた。

「最後に訪れた視察には友達になろうと言われた」

ミレアがそれに明るい表情を浮かべる。しかしすぐベリルは視線を落とした。

「あの施設には科学者と専門家、警備が合わせて300人いた……」

「科学者以外の人間は私の正体を知らなかったが、それなりに愛してくれていた」

一瞬、言葉を詰まらせる。

「15歳の時、施設が襲撃を受けた」

「！？」

ベリルは苦い顔をして少し声が低くなる。

「私のために300人が死んだ」

奥歯を噛みしめる。

「……」

ミレアは彼が心の奥で泣いているのだと感じた。

「あなたが今、ここにいるという事は……皆あなたを救うために頑張ったのでしょうか？」

「！」

その言葉にベリルは驚く。彼が言わなかった事をミレアは即座に理解したのだ。

「……」

ミレアの瞳を見つめる。すると彼女は強い口調で発した。

「あなたは人間です」

その眼差しはベリルを捉え、その言葉に偽りはないのだと主張する。

「……ありがとう」

ベリルは目を細め、ささやくようにつぶやいた。

「むしろあの男の方が人間ではありませんわ！」

「え？」

ミレアは勢いよく立ち上がる。

「私あの男の姿を見た時、背筋が凍りましたもの！」

「……はは」

ベリルは小さく笑った。

「しかし奴に知られてしまった以上、今のまま……という訳にはいかんだろう」

「！」

ミレアは眉をひそめる。もし、あの男がその情報を流してしまったら……

「あなたは素直に行くつもりなのですか？」

A国が迎えに来たら……素直に従うの？」

「……」

ミレアの愁いを帯びた瞳を見つめたあと、視線を宙に移した。

「逃げ続ける事は出来ない。私はそうまでして自由は望まない」

誰かが傷つく事は彼の望むものではない。施設が何者かの襲撃を受けた時、助けてくれた男が言った。

『お前は人類の理想なのだ』と――

いがみ合い、争い合う人類が唯一つとなっているベリルは人類の理想だ。そんな自分が血を流してまで自由を得る事など……出来はしない。

「……」

目を伏せたベリルをしばらく見つめたミレアは、意を決したように目をつり上げた。

「私ならどうにか出来るかもしれません」

「！ 何？」

「私はあの男と一瞬、目を合わせました。まだ“つながり”があるかもしれません」

「つながり？」

ベリルは怪訝な表情を浮かべる。それに構わずミレアは話を続けた。

「集中します。支えていてくださいね」

「え？」

ミレアはにこりと笑って座り直すと、手を胸の前で組む。そして静かに目を閉じた。

「……」

祈るような姿にベリルは無言になった。

一方——キリアは元の施設には戻らずに、オーストラリアにある組織の支部に身を預けていた。組織のデータは全て端末でつながっている。本部でなくとも組織の情報は引き出せるという訳だ。

他の情報も引き出そうとキリアは支部のデータ室で1人、検索をしていた。その時……

《キリア……》

「！」

声が頭の中に響いた。するとキリアの体がビクリと強ばる。目はうつろに何も映さなくなった。

《キリア……ベリルの情報を全て消去しなさい》

「は……い」

ゆっくりと手が動き、データの消去を始めた。

「消去しました」

つぶやくように独り言を発するキリア。

《よくやりました……では次に、あなたの知るベリルの全てを口外する事は出来ません。口を開く事も文字に残す事も、あなたは全ての行動を自らで阻止するでしょう》

「はい……そうします」

そしてハッと気付く。何が起こったのか解らずまばたきを繰り返した。

「……俺は何してた？」

目の前のディスプレイに目を向ける。

「！ ええっ！？ データが消えてるっ？　なんで……っ？」

キリアは訳がわからず検索をしまくるが、ベリルのデータは何1つ残ってはいなかった。

「なんでえっ？」

いくら考えても解らない。自分で消したのか？　そうとは思えないがどうして消す必要があるんだ。

「どういう事だろう」

暗い部屋でキリアはガツクリと肩を落とした。

「……」

微動だにしないミレアを見つめるベリル。一体、何をしているのだろう……？

「！」

「はあっ……はあ……」

ミレアが大きく深呼吸して額の汗を拭った。

「大丈夫か？」

「ええ、大丈夫です」

ニコリとベリルに笑いかける。

「これでもう心配いりません。あの男があなたの話をする事は無いでしょう」

「？　どういう事だ？」

意味が解らず困惑するベリルに少女は疲れた表情で小さく笑った。

「私の力の1つです。この力はもう使えなくなりましたが」

「はあ……」

ベリルは呆けた声で応えた。

*力への問いかけ

キャンプに戻ったベリルとミレア。ベリルはいくつも灯されているたき火の1つのそばに腰掛ける。そんなベリルの右隣にミレアもちょこんと座った。

「……」

まるで懐いてくる子犬のようだ……とベリルは少女を見下ろす。年齢差からいっても彼女が青年を慕うのは自然な事なのかもしれない。

「！」

ミレアがベリルの体に頭を預けた。まだあどけない顔立ちでニコリと笑い問いかける。

「このまま寝てもいいですか？」

「構わんが……」

「おやすみなさい！」

ミレアは嬉しそうに目を閉じた。

「何？ ミレア様がそんな事を？」

次の朝、ベリルは詳細は述べずにアレウスに昨日の事を尋ねてみた。

「……」

アレウスはしばらく考えて傭兵たちと談笑しているミレアを一瞥する。

「ミレア様はいくつかの力を持っている」

「！」

「その中には、1度しか使えないものもあるんだ」

「……ほう？」

「俺たち種族は昔からそうやって数々の能力を宿してきた。特にミレア様、統率者の血筋にはいくつもの力を持って生まれる者が多い」

「不思議な種族だな……」

ベリルは聞いた事を半ば後悔した。

「ミレア様は“つながり”と言ったんだな？」

「ん？ ああ」

「ならば、おそらく遠隔操作をなさったのだろう」

「遠隔操作？」

「人の縁とは不思議なものだ。ただすれ違っただけでも『縁^{えん}』というものは出来る。ミレア様は目を合わせた者と“つながり”を持つ事が出来る」

「……ほう」

解るような解らないような……ベリルは眉間に少々の縦じわを刻んだ。

「その『つながり』を利用して、力をお使いになったのだろう」

「そ、そうか。ありがとう」

なんだかククラしてきた。ベリルは頭を抱えて離れようとした。このまま聞いているとますます理解が難しくなりそうだった。

自分の存在はまだ科学的に生まれたからいいにしても、彼らの言っている事には理解出来ない。変な知恵熱が出そうだった。

「ベリル」

「ん？」

遠ざかろうとしたベリルをアレウスは呼び止めた。

「ミレア様は『一度しか使えない力』をお前に使ったんだ。それだけは理解してくれ」

「！」

それから移動準備を始めるベリルたち。

「え？ 俺がお前の車を運転してついて来い？」

「うむ、少し調べたい事があるのでね」

ベリルは1台の車を親指で示しながらアレウスに言った。10tトラックを思わせる車体。中にはコンピュータが積まれている。

情報収集能力と通信設備が整っている。彼らの間で『ドペスター』と呼んでいる車だ。

「隊の中ほどに位置していれば心配はない」

「だったらいいが……」

ちらりとミレアを見たアレウス。彼女がベリルの側にいたい事は言わなくても気付いている。きっと悲しい顔をするだろうな……アレウスは小さく溜息をついた。

「え、調べ物……ですか？」

案の定アレウスがそう言うときミレアは少し陰りを見せた。しかし護られている立場としてミレアは笑顔で了承する。

「……」

少女の憧れからなのか恋なのか……アレウスはミレアを見つめた。

「昨日襲われただつてえ!？」

一緒にドペスターに乗り込んでいるジェイクが声を張り上げた。

「うむ。すぐに消えたがね」

「おいおい……」

「そこから調べられそうだ」

キーボードを叩きながらベリルが発する。何の情報も得られなかった側としてはある意味ラッキーだ。ベリルは左手で携帯を取り出し電話をかけ始めた。

「ヤン、調べてもらいたい事がある」

青年がヤンと呼ぶ人物は『探し屋』と呼ばれる情報収集の専門家だ。ベリルはそういった人間や会社といくつも通じている。

「キリアという人物について頼む」

言って通話を切った。

「!」

しばらくしてコンピュータの検索結果がディスプレイに映し出された。いくつかある中で知りたい情報だと思われるものをクリックする。

「！『アトラック・メナス』……？　おいおい、厄介な組織だぜ」
横で見ていたジェイクが神妙に口を開く。

「……」

それにベリルは沈黙した。

『アトラック・メナス』

10年前に出てきた犯罪組織で、この数年でトップにまでのし上がってきた組織だ。

「ボスの名前はセラネア。キリアってのは組織の中でもトップクラスの兵士だな」

ジェイクがディスプレイに示されている文字を読み上げるのを聞きながらキリアの画像をクリックして拡大する。それは確かに昨夜見た顔だ。

「……ふむ」

ベリルはキリアと組織の情報を読みながらミレアの事を考えていた。そんな強大な組織がミレアを狙っている。一体どんな力を持っているんだ……？

「1人の少女を追い回すほどの力。か」

ぼそりとつぶやく。

一方――ミレアはアレウスの運転する車の助手席で赤い荒野を視界全体で捉え哀しげな表情を浮かべていた。

「……」

どうしてそんなにこの力を求めるのだろう。こんなモノに、なんの価値があると……？　誰でも求めるモノなのかもしれない。

でも……これは人を幸福にするモノではないはず。だからずっと残してきた力なのかわ。

『統率者』に遙か昔から脈々と受け継がれてきた『力』。

それが自分に引き継がれた時、彼女は困惑し悩んだ。それは今も彼女の心を苦しめ悩ませている。

「……」

私はこの力を使うくらいなら自らの命を絶つ事もいとわない。

「この力を使つては……ダメ」

ミレアはつぶやき、決意を硬くしてキリリと目を吊り上げた。

「ベリル……」

彼ならきつと私の心を理解してくれる。ミレアは静かに目を閉じた。

* 怒りと自由

「一体どうなっただんだ!？」

キリアは組織の支部にある自分の部屋で声を張り上げた。

ベリルの正体に関するデータが全て消え、いつそのこと暴露してやろうと話し出すと口が動かない。

こんな恐怖は初めてだ。自分の身に何が起こっているんだ? いいくら考えても解らない。

「!」

ふと思い起こす。

「そついえば……女の声のようなものが聞こえた気がする」

女……若い声だ。

「! まさか……あの女か?」

ベリルに会った時うしろにいた女。考えられるのはそれしかない。「ボスはこの女を求めていた。何か妙な力を持っていたとしても不思議じゃない」

元々、ボスのセラネアも妙な雰囲気を持ち変な力が持っているとしてもおかしくはなかった。

「……あの女」

横からいけしゃあしゃあと俺に何を……キリアは舌打ちをして宙を睨み付けた。

* 胸の苦しみ

「で、要請した仲間とはいっ合流するんだ？」

ジェイクがベリルに尋ねた。今は野営の準備をしている最中である。

「……」

ベリルは考えあぐねているようだ。

こんな事は初めてだった。ジェイクがベリルとよく組むようになってその戦闘センスに驚いたが、何よりも彼の指示がいつもの確だという事に感心した。

己の勘をフル稼働させられる奴なんだろうと思う。しかし、今回はそういう訳にはいかないようだ。

「そうだな…… 2日後の目標地点を合流ポイントとしよう」

ベリルは地図を広げて場所を示した。それを聞いたジェイクは通信員にその事を伝えるためにドペスター車に向かう。

ちなみに、捕まえていた敵の男たちは組織の名前が判明した時点で解放した。

「ふむ……」

ベリルは思案していた。相手の情報が手に入った事は喜ばしい事だが、その組織からどうやってミレアを守ればいいのか解らない。今までの状況を考えるとそう簡単に彼女を諦めないだろう。守り続ける事は困難だ。

「いつそ組織を潰せれば……」

難しいが出来ない事ではない。

15歳で傭兵に弟子入をして18歳で独り立ちした。たった3年で傭兵としてのノウハウを全て学び、師の名に恥じない功績を残してきた。

『この世界で長生きは望めない』

自分の生い立ちを思えば、それが最も安心出来る事だったのかも

しない。

己の足で世界を感じ己の持つ知識・能力を活かす事が出来た。それだけで十分だった。いつA国が迎えに来ても……このまま死んでも悔いはない。ほんの一瞬の自由でも彼は掴む事が出来た。

例えこのまま、また白い部屋に死ぬまで居続けなければならないとしても己の足で見た世界は忘れない。

「私は『私』としてここにいる」

ベリルは口の中でつぶやき右手を握りしめて星空を仰ぐ。

彼を傭兵として導いたのは10歳の時に施設で戦術を教えたブルー教官だ。ブルーはベリルの並外れた戦闘センスを見抜き、己の持つ全てをベリルにたたき込んだ。

15歳の時、施設が襲撃を受けた際にベリルを逃がしたのも彼である。ブルー教官だけはベリルの正体を知っていた。戦いを教える者としてベリルの事を知っておかなければならない。科学者たちはそう考え、彼にベリルの全てを教えた。

銃弾が飛び交う中、最後に彼はベリルに発した。

『お前の存在が善か悪なんて俺には解らない。だがお前は死んではならん。何故ならお前は人類の理想であり希望なんだ』

彼はベリルの逃げた通路に立ちはだかり、あるだけの発火装置を点火させた。

誰もいなくなった施設でその跡を見たベリルは声を詰まらせた。

自分のために何故、人が死ななければいいのか解らない。

そして目の前にある『自由』に手を伸ばした。長くは続かない自由だとしても、ほんの一瞬でもいい世界を肌で感じたい……今、そのチャンスなんだ。

国の人間が駆けつける前に彼は施設をあとにした。

「……」

ベリルはそこまで記憶を辿り静かに目を閉じた。

「眠れないのか？」

「……はい」

ベリルは、トラックの荷台で星を眺めているミレアに声をかけた。
近くにいたアレウスはそれを見て少し遠ざかる。

「私の力を不思議がっているのでしょうか？」

「！」

ミレアが静かに口を開く。少し悲しげに笑った。

「それでも、私が狙われている理由は言えません。ごめんなさい」

「では1つだけ。その力はお前を狙い続けるようなものかね？」

それに、ミレアは無言でうなずいた。

「この力を求める者は、きっと私を狙い続けるでしょう……」

ベリルはミレアの表情を見て小さく溜息を漏らす。

「1つ言っておく。だからといって死のうとはするな」

「！」

「守る者として、それだけは許容しかねる」

「でも……っ」

「お前はまだ若い。これからしたい事がもっと出来るはずだ」

「……っ」

ベリルの言葉に喉を詰まらせる。しかしすぐ語気を強めた。

「では……あなたはどのようなのですか？」

「何？」

ミレアはベリルを見据えてきりりと目を吊り上げ発する。

「あなたは、死が来る事を望んでいます」

「！」

「私もそれは許せません」

「……」

「あなたもまだ若いではないですか。私と同じです」

「同じではない」

「いいえ、同じです」

ベリルは眉をひそめる。いつから彼女はこんなに強くものが言えるようになったのか。人は少しずつ成長していくのだ。と見せつけ

られた気分だ。

「あなたは私と同じです」

言い聞かせるようにミレアは身を乗り出して応えた。

「だから……」

「！」

少女はベリルの首に腕を回し小さく発する。

「だから……死にたいなんて思わないで」

「……」

深夜——またあの感覚だ。ベリルは眉間にしわを寄せた。何かが来ている……

ここには雑木林は無い。代わりに連立する大小の岩。その中に入り精神を集中する。

「……」

この気配……キリアか。その方向に目を向けた。

「ホントに勘がいいねえ」

キリアが笑いながら出てきた。

「俺との約束、忘れた訳じゃないよな」

「……」

「ダンマリか？」

ミレアの言った事が本当ならば奴の脅威はほとんど無くなった。

闘って勝てるかどうかは解らないが、とにかく自分の秘密は守られるのだ。

「お前、俺に勝てる気での？」

苛ついたキリアが舌打ちしながら言った。それでも応えないベリルをギロリと睨み付ける。

「じゃあ死ねよ」

「！」

駆け寄ったキリアにベリルは構える。予想以上に速い、キリアのナイフをギリギリでかわした。ベリルもナイフを取り出しその刃を

受ける。

金属のぶつかる音とこすれる音。暗闇に輝く刃が素早く走る。

「お前、俺に比べたら経験浅いんだよ」

言い放つ言葉は冷たく、それをまざまざと見せつけるように確かにキリアは強かった。

「くっ」

力の差に悔しげに声を漏らす。

次に刃がぶつかりあった時、ベリルの刃は強く跳ね返された。

「！」

ベリルがひるんだその瞬間――

「があう！？」

キリアのナイフはベリルの右腕を深々と突き抜け、後ろの岩に突き刺さった。

「ぐっ……っ」

苦しむベリルに顔を近づけてニヤリと笑う。

「言ったる？ お前はまだ若い」

「きゃあ！ ベリル！？」

声のした方に2人は顔を向けた。そこにはミレア。ベリルの姿に青ざめている。が、青ざめたいのはベリルの方だった。キリアの口の端が喜びで歪んだからだ。

「ミレア……逃げろ」

「逃げればこいつを殺す」

キリアは笑ってミレアに手を差し伸べながら歩み寄る。

「何をしている！ 走れ！」

「！」

ビクリと体を強ばらせたミレアにキリアは素早く駆け寄った。

「残念」

「！……っ」

キリアは彼女の腹部を強く殴って意識を失わせた。

* 追撃

ミレアを抱えたキリアは嬉しそうにベリルにニヤけた顔を向けた。
「取り返したきゃ追ってくるんだな」

「きさま！」

睨み付けるベリルに手を振りながら闇夜に消えていく。

「ぐ……」

ベリルはナイフで縫いつけられた岩から離れ、ナイフを貫いたままキャンプに戻った。

「！ ベリル！ どうしたんだっ！？」

「私の事より、ドペスターは……」

驚くジェイクを一瞥し、コンピュータの搭載された車を確認するとゆっくり車に向かった。

開いた両開きの後ろの扉から中に入り腕の痛み少し唸って椅子に腰掛けキーを打ち始めた。

「ベリル！ ミレア様はどこだっ」

アレウスが血相を変えて車に飛び込んでくる。ベリルはアレウスに顔を向け、ゆっくり応えた。

「連れ去られた……すまん」

「すまんで済むか！」

「やめろ」

掴みかかろうとしたアレウスをジェイクが制止した。

「！」

アレウスはようやくベリルの状態に気が付く。

「お前……っ」

「誰か！ ドク（ドクター）を呼んでくれ！」

ジェイクが声を張り上げて医療経験のある仲間を呼ぶ。

「……」

ナイフを抜かずに作業をするベリルをアレウスはいぶかしげに見

つめた。

「治療する直前まであのままがいいんだよ。血が吹き出ない」
ジェイクは説明した。

「！」

ディスプレイに点滅する赤い点が表示された。

「それは？」と、ジェイク。

「以前ミレアに取り付けてあった発信器だ」

「！？」

驚くアレウスにベリルは小さく笑った。

「もしもの時のためにな」

言ってジェイクに目を向ける。

「全員にヘッドセットを配ってくれ」

「！了解」

アレウスの手にもヘッドセットが乗せられる。横にいた男が使い方を丁寧に説明した。

「アレウス。すまないが私の車でついてきてくれないか」

「解った……」

今の自分には何も出来ない……アレウスは素直に従った。

「……っ」

痛む体をイスから起こすと床にしゃがみこんだ。

「ベリル！」

医療器具を持った青年が車に駆け込む。ベリルの服を破いて傷を確かめた。

「……」

ナイフはみごとに腕を貫いている。それに眉をひそめ確認するように口を開く。

「いいか抜くぞ」

「頼む」

肩にきつくロープを縛って止血し、男はゆっくりとナイフに手をかけた。

「ぐっ……う！」

抜いたナイフを乱暴に車の床に置きガーゼで流れる血を拭う。

「幸い、太い血管を傷付てはいらないようだ」

消毒液をたっぷりつけた布で傷口を拭き取り糸と針を用意した。

「痛むが我慢しろよ」

「やってくれ」

男は躊躇なく糸のついた針で傷口を縫っていった。

「う……っ」

ベリルは小さなうめき声を何度か上げたが左の拳を強く握りしめ耐え続けた。

「で、どうするんだ」

戻ってきたジェイクがベリルに尋ねる。

「包帯はきつめに巻いてくれ」

「わかった」

ベリルは男に言っただけで苦い顔のままジェイクに視線を向けた。

「ひとまず仲間との合流地点に向かう」

「！ 彼女を追わなくてもいいのか？」

「……」

それにディスプレイの赤い点を一瞥した。

「今の数では追いついたとしても勝ち目はない。向かっている先は東、おそらくオーストラリアにある支部に行く気だろう」

「仕方ないな。早く来るように急かしておくよ」

ジェイクはウインクして車に乗り込み通信機に手をかける。ベリルは新しい服を羽織ると、再びイスに腰掛けた。

「ミレア……」

必ず救い出す……その目に鋭い光が宿る。

『力を持っている』というだけで彼女は苦しみ、その命すら断とうとしていた。

アレウスの言葉では統率者の血筋に必ず現れる力なのだそうだ。その力もまた、『たった1度だけ使える』というもの。

しかし、その力だけは『血筋に1度だけ』という特別なもので彼女が死んだからといってその力が消える訳じゃない。

本当に解放されるのはその力を使う時——しかし、統率者の血筋たちはそれを拒んできた。

「それ程に大きな力なのか……」

ベリルは苦い表情を浮かべた。

ジープを東に走らせているキリアは鼻歌交じりだ。

「あゝスツキリした」

ベリルの腕を刺したのとミレアを捕えた事でキリアの怒りはひとまず収った。

「さて。あいつが来る前に支部の奴らを統率しておかないとね」
キリアは支部の人間を使ってベリルとの全面对決を計画していた。そのためミレアを連れ去ったのだ。

「あ、一応ボスにも連絡しておかないとね。ボスの命令だし」

キリアは携帯を取り出し車を走らせながら本部にかけ始めた。

「キリアだけどボスはいるかな？ 重要な連絡があるって伝えてしばらく待つ。」

「あ、セラネア様？ 例の女を捕まえました」

<本当か！？>

携帯電話の向こうの声がうわずっている。

「はい、このまま支部に連れて行って……」

<我が直接そこまで行こう>

その言葉にキリアはギョツとする。

「えっいや、そこまでなさらなくても……」

<やっとなの望みが叶うのだ>

弾む声にキリアは眉をひそめた。

「こいつあ参ったな」

通話を切ったキリアは舌打ちをした。予想外だ。まさかボス本人

がわざわざ来るなんて……ベリルと戦ったあと、ミレアを本部に送りつける予定だったキリアは当惑した。

「そんなにこの女は重要なのか？」

まあいいけど……キリアは気を失っているミレアを一瞥して笑いながら溜息を漏らした。

「……あいつ」

そしてベリルと闘った時の事を思い起こす。本当は腕の太い血管を狙っていた。しかしベリルはとっさに避けたのだ。

「今のうちに殺しておいた方がいいな……今後、俺の脅威になりかねん」

自分の下に取り込めないなら殺さなければならない。キリアは恐ろしいまでの鋭い目を宙に向けた。

残り10人の合流地点に車を走らせるベリルたち。ミレアの発信器を辿る作業を別の仲間に任せ、ベリルは自分の車に戻った。

後部座席で着替え直す。黒い半袖のインナースーツに厚手の上着を羽織り薄いベストを着る。他の仲間に比べるとおそろしく軽装だ。「動きが制限されるのは避けたい」

笑いながらアレウスに伝える。「キリアと渡り合える装備を」と考えた場合、軽装になったのだろう。キリアの計画をベリルはすでに予想していた。

勝敗と考えるなら、あの時点でキリアの勝ちでもあった。

「……」

確かに、私はまだ経験不足だ。奴の動きに対応しきれなかった。

「急所を避けるのが精一杯だとは……」

ベリルは薄く笑う。キリアは自分の能力を見たいのだ。ベリルはそれを感じて、眉間にしわを寄せる。

「ベリル……すまなかった」

「！」

運転しているアレウスが小さく言った。

「私のせいだ。責められても何も言えん」

「お前はよくやってくれていた」

一時の感情でベリルを責めるのは間違いだ。これだけの事をして
くれているのに……アレウスの表情をバックミラーで見てベリルは
苦笑いした。

銃とナイフを確認し仕舞っていく。頭の中では、仲間をどう動か
せば勝てるのかを思案していた。

「ベリル……」

「ん？」

アレウスは言葉を少し詰まらせたあと思い切って口を開いた。

「もしミレア様が力をお使いになったとしても……ミレア様だけは
助けてくれ」

「！」

力を使えば用無しで殺されるかもしれない。アレウスはそれを危
惧ぐしていた。

「当然だ」

「ありがとう……」

数時間後、急ぐように走らせたベリルたちの車は予定時間より早
く到着した。すでに夜は明け、太陽が昇ってきている。

「アレウス。巻いてくれないか」

車から降りてバンダナをアレウスに手渡し右腕を示した。

「……いいのか？」

傷口の上じゃないか。

「包帯だけでは心許ない」

アレウスはバンダナを受け取り、ベリルの右腕にきつく縛り付け
た。

「……っ」

痛みで少し声が漏れる。確認するように右腕を動かしアレウスに

小さく笑いかけた。

「合流時間までまだ少しある。お前たちの話を聞かせてはくれないか？」

ベリルが静かに問いかけた。

「……」

アレウスは目を伏せて昇り来る太陽の方角に顔を向けた。

「これは言い伝えて、本当かどうかは解らない」

聞きながらベリルはトラックの荷台のへりに左腕を乗せた。

「俺たちの力は、神から授かったものらしい」

「！　ほう……？」

* 神の力

遠い遠い昔――地上に落ちてきた神は大きな傷を負った。

その大陸の人々は神を献身的に治療し、神はその礼にと「自分の力をいくつか授ける」と言った。そこにいた何人かは自分の望む力を授かり統率者にはさらに多くの力を与えた。

そして傷の癒えた神は天に帰って行った。

「国は、平和だったという」

しかし……そんな平和も長くは続かなかった。数百年後、統率者に従わない者が現れ出した。

『我こそが国を治めるにふさわしい!』

統率者を護るいくつかの一族が言いだした。長く続いていた統率者の血筋に反感を抱いた結果だ。そんな反乱が水面下で行われていた時……

「統率者が『大陸が沈む』と預言した」
よげん

「!」

「半数の民が統率者に従わずに……国に残ったという」
アレウスは苦い顔になった。

* 一粒の涙

「興味深い話だ」

ベリルは荷台に背を預け腕を組む。
なんそう

「何艘もの船で脱出したため途中で皆、散り散りになり統率者とそれを護る一族の乗った船は中国大陆に流れ着いた。と云われている」
「ではミレアの持つ力も神から授かったものだと？」

「本当に神からの授かり物なのかは解らない。元々、我らの種族が持っていた能力かもしれないし……」

「そう考えた方が妥当だろうな」

神から授かったものだろうが元々の力だろうがベリルには納得のいく話ではなかった。自分は現実主義者でも幻想論者でもないが、あまりにも非現実的な話に脳がついて行けない。

自分から聞いておいてやはり頭がクラクラした。ベリルは頭を抱えながら話を自分のテリトリーに戻す。

「力についてはいいとして。ミレアの持つ力を組織の誰かが知っていて狙ったという事になる」

「!？」

アレウスはようやく事の重大さに気が付いた。

「仲間の中に……裏切り者が？」

「そこまでは解らんが」

お前たちの事を知る者かもしれん。警戒した方がいい。ベリルは目を細めてささやくように発する。

「……」

アレウスは驚愕した。きょろがく仲間だったら裏切り者だ。しかし、もし仲間から聞いて彼女を狙ったのだとしたら……その仲間はとうなったのだろう。

酷い目に遭ってはいないだろうか？ 殺されてはいないだろうか
……アレウスは奥歯を噛みしめた。

「こんな力のために……っ」
握った拳をふるわせる。

「はい。チャツチャと準備してね」

組織の支部に戻ったキリアは軽く指示をする。それを聞いた兵士たちは「よく言うよ……」と半ば呆れて従った。

「まあ、勝てるだろうけどね」

こっちは60人以上いるんだし、あつちはせいぜい30人がいいトコだろ。キリアはニヤリと笑った。

優位に立った勝利でも勝ちも勝ち。むしろなぶり殺しにした方が後々、組織の中でもさらに威張れそうだ。恐怖を見せつければ自分に反抗する者もいなくなるだろう。キリアはそんな考えでいた。

「自分のモノにならないモノに執着するほど俺はねちっこく無いんだよ。ベリル」

ならば俺のために役立つてもらおう。

「俺に従った方が良かった。と、思うまで痛めつけてやる」

狂気にも似た光がキリアの目に宿った。

「ベリル……」

ミレアは部屋に閉じこめられ不安で一杯だった。ベッドに腰掛けで祈るように胸の前で手を組む。

「私はどうすればいいの？」

1粒の涙が頬をつたい、タイル張りの床に音もなく落ちた。

「助けて……ベリル」

強く、祈る。

「！」

ベリルは何かを感じ取り遙か東に顔を向けた。

「どうした？」

「いや、なんでもない」

ジェイクに問いかけられて気のせいだったと応える。一瞬、ミアが言っていた『つながり』という言葉が脳裏を過ぎった。

彼女とは何度か目を合わせている。つながりが本当ならば自分にもそれが出来ているのだろうか？ 距離に関係なく会話出来るのなら、励ます事も出来ただろうに……

大型輸送機が到着し、ベリルは皆を集めて事前のおおまかな作戦を話し出した。

「いいか、こちらの戦力は最低数だ。相手の規模から想定すると敵の数はおよそ60〜70」

それに何人が口笛を鳴らした。ベリルは衛星から撮影された映像を引き延ばした写真を差す。何もないように思われる画像だが微妙な線がある事が窺えた。

「施設は地下にある。入り口は最低でも4ヶ所だろう。この土地に施設を設けるのは金がかかりかかる。規模はそれほど大きくはないと想定される」

「で、どうする」と、ジェイク。

ベリルはそれに無言でうなづく。

「とにかくまずモニタールームの制圧が優先だ。そこから細かく指示を頼む。モニタールームの制圧はジェイクに任せる。私とアレウスはミアの搜索に重点を置く」

「2人だけで大丈夫か？」

「心配ない」

ベリルは立ち上がり仲間を見回した。

「チームを3つに分ける。それぞれに役割を設けるぞ」

その時――

「！」

上空に飛行機の影。数機的高速輸送機が旋回しパラシュートが開いていく。

「敵か!？」

ジェイクの言葉のあとドペスターにいた通信係が声を張り上げた。

「仲間だ！ 援軍だよ！」

「……」

ベリルはその言葉に目を丸くした。

パラシュートで降り立った真つ先にキャンプにたどり着いた1人の男がベリルに笑顔を向けた。

「よう！」

「クライド！？」

驚くベリルに手を差し出す。

「お前が随分、仲間を集めているって聞いてな」

俺も仲間を集めて来た。駆け寄ってくる幾人もの男たちを親指で示しながらクライドと呼ばれた男は言った。

栗色の短髪に緑の目。29歳のクライドはベリルと何度か組んだ事のある傭兵だ。明るい性格の彼はベリルと気が合う。

「仲間の危機には駆けつける。それが俺の信条」

クライドは親指で自分を示しウィンクしてニヤリと笑った。

「は……よく言う」

ベリルは呆れて笑いをこぼしたがこれで戦力はかなり増えた。

「何人だ？」

「17人連れてきた」

「それは有り難い。作戦が練りやすくなった」

「アトラック・メナスか……厄介だな」

クライドが舌打ちしながら応えた。

「ここは支部だ。人員は60〜70人とふんでいる」

「ふむ……チームはいくつに分ける？」

「4つだ。長期戦に持ち込まれる前に叩く」

他の支部からの援軍が来る前にミレアを救出して撤退する考えだと、ベリルはクライドに言った。

「すでに呼んでいるとしたら……ヤバいんじゃないのか？」

そんなクライドの言葉にベリルはニヤリと笑った。

「キリアという男、自分の力を過信している。と見ている」

「！」

ミレアが閉じこめられている部屋のドアが開く。入ってきたのはキリアだ。

「元気かい？」

「何の用です……」

睨み付けるミレアに肩をすくめた。

「怖いねえ。別に盗って食おうって訳じゃないんだからさ」

「私を解放しなさい」

「嫌だね」

言っでぐいと顔を近づける。

「！」

「あんた、可愛いね。ベリルの事が好きなの？」

その言葉に一瞬、体を強ばらせた。

「な、何を言っているのです」

「そつだよねえ」『プラモデル』なんて好きにならないか」

軽く言ったキリアにミレアはカッとなった。

「なんて失礼な人なの！？ 彼は人間です！ あなたこそ人間なのですか？」

「あれ？ 怒ったの？」

「誰だつて怒ります！」

さして気にも留めずにキリアは笑い続ける。

「お前だろ、俺に何かしたの」

「！？」

キリアはミレアの前をうろつろと歩きニヤけた顔で彼女を一瞥した。

「どう考えてもお前以外いないんだよね。俺に奴のデータを消させたの」

向き直ったキリアの目には怒りが見て取れた。

「……」

とぼけ続けるのは無理かもしれない。そう思ったミレアだが、キリアはどうでもいいと言つかのように話を切り替える。

「まあいいけど。どうせ奴はもうすぐ死ぬし」

「！」

それにミレアは勢いよく身を乗り出した。

「いいえ！ あなたなどに彼が負けるものですか！」

震えながらも鋭く言い放った少女にキリアはゾツとするような笑顔を向ける。

「根性とか気合いとか、そんなの戦いに無意味なんだぜ」
つぶやくように言って部屋から出て行った。

「……」

ミレアは静かになった部屋で自分の手を見つめた。

「どうして？」

どうしてこんな力を持ったのだろう。誰も幸せになどしないのに……私が死んでもこの力は消えない。

「使わなければ無くならない力なんて！ なんて辛い事なのだろう」
無理矢理に誰かを選ばなければならないなんて……過去の統率者たちも放棄できない力に悩んだに違いない。

この力を得る時には自然に頭の中に声が響く。神の声なのか過去の統率者の声なのかは解らない。授けられた力の重大さをその時に初めて実感するのだ。

「誰か……この呪われた力を消し去って」

ミレアは両手で顔を覆い弱しくうなだれた。

*アタックスタート

「大体の作戦は飲み込めたな。ポイントまで移動だ」

ベリルの号令で傭兵たちは一斉に動き出した。

「すまないが運転を頼む」

「ああ」

自分の車に近寄りアレウスに言って助手席に乗り込んだ。その表情から時折、傷が痛むのだと解る。この傷でまだ戦おうとしているベリルはミレアを本当に救いたいのだろう……それが感じられてアレウスは声が出なかった。

「気にするな。私の責任でもあるだけだ」

「！」

驚いてベリルを一瞥する。

「心が読めるのはお前の方なんじゃないか？」

「まさか！」

ベリルは笑って肩をすくめた。

「お前の顔を見ていれば解る」

腕の痛みを確認するように動かしながら応えた。

「それに……」

ベリルは付け加える。

「あの男を野放しには出来ん」

「！ キリアっていう奴か」

無言で頷き声を低くして発した。

「私に戦えと言う。ならば戦う他はない」

「……」

その目にアレウスはゾクリとした。怒りと喜びが入り交じる……そんな瞳だ。

「戦いが嫌だとは言わない。好きな部分も確かにある。だが、人を殺める事に関しては……違うと言える」

奴と同じではない。

「人を殺めて楽しむ趣味はさすがの私にもないよ」

目を細めて笑った。戦いでわき上がる高揚感を否定はしない。だが、流される血に眉をひそめるのは事実だ。

「そんな世界、無い方がいいに決まっている……」

さらに数時間後——ベリルたちは目的の支部の近く、赤い点が止まった1km手前で停止した。カモフラージュのためジープやトラックに砂漠色サンドカラーの布を被せる。

「まず侵入口を確認する」

ベリルが言った時、上空に1機の小型ジェットが飛んでくるのが見えた。監視しているとジェットが着陸して人影が1つ出て来る。

「！」

「見えるか？」

双眼鏡を覗いていたベリルが確認するようにアレウスに問いかけた。

「男だな……随分とエラそうというか、貫禄があるというか」

アレウスの言葉にベリルは苦笑いを浮かべる。そのまま監視を続けると地面が開きその男は飲み込まれるように入ってしまった。

「1つ目の入り口は確認出来たな」

ジェイクが笑って発する。

「じゃあ、あと3つ探すぞ！」

クライドが声を張り上げて腕を上げると数人がそれに応える。ベリルに軽い敬礼をしてクライドは搜索を始めるためジープに乗り込んだ。

「えっ！？ もうボスが到着したの？」

キリアは声が裏返った。早いよ……そんなに女が手に入って嬉しいのかい。セラネアの行動に半ば呆れる。

「参ったなあ、そろそろベリルが攻めてくる頃合いなんだけどなあ」

仕方ない、2人だけでいられる部屋を用意するか。キリアは困った顔をしながらミレアの部屋に向かった。

「キリアはどこだ？」

セラネアは長い黒髪を後ろで束ね金色の瞳をぎよろつかせた。高そうな布で作ったローブを揺らし建物内をうろつく。男たちはセラネアに頭を下げて通り過ぎるのを待った。

「これはこれは、セラネア様」

キリアはわざとらしくセラネアに両手を広げて歓迎の挨拶をした。

「ミレアはどこだ」

「こちらです」

うながして歩き出す。

「丁寧に扱っただろうな？」

「もちろんです」

言い出しにくそうにしばらく沈黙していたキリアだが意を決して声を上げた。

「実は少々、予定外の事がありました……」

「なんだ、言ってみろ」

キリアは立ち止まり部屋のドアを開く。

「！」

そこは広い部屋。何も無い四角く区切っているだけの空間だ。入ってきた人物にミレアはビクリと体を強ばらせる。

「おお！」

ミレアの姿を見つけたセラネアの顔は喜びで歪んだ。

「ここの支部が辿られていたらしく、彼女を救おうとする者がすぐそこまで来ています」

「！　なんだと？」

セラネアは眉間にしわを寄せた。

「ベリルが？」

ミレアの顔がほころぶ。

「ベリル……あの男か。キサマ殺せずにいたのか？」

「すみません。奴は思った以上に手強くて」

苦笑いで応える。そしてすぐ真面目な顔になり腰を丁寧に曲げた。

「では、私は奴を迎え撃ちます」

「待て」

セラネアはキリアを制止してギロリと睨み付ける。

「キサマは前々から我に反抗的だったな」

「え？ そんな事ありませんよ」

とぼけるキリア。

「お前は我の側にいるのだ」

「そんな！ ベリルはどうするんですか」

セラネアはゆっくりキリアに近づき……その目を見据えた。

「！」

とたんに体が動かなくなる。

「な、なんだ……？」

「お前は我の下僕だ」

「……っ」

ミレアはその光景に息を呑んだ。

「これからは我のために働いてもらうぞ。 我のために命を賭けるのだ」

「うっ」

「まさか……この男は!？」

一方、他の入り口を探していたクライドがベリルの処に戻って報告していた。

「ベリル！ 見つけたぞ」

「！ そうか」

クライドはベリルが広げた地図に入り口を書き記していく。

「ふむ……」

しばらく思案して口を開いた。

「東にA班。西にB、北にC。南にDだ。私とアレウスは西から入

る」

「了解！」

仲間たちはそれぞれに散った。

「……」

走り去るジープを見つめるベリル。重要な事柄かどうかも解らないのに仲間たちは動いてくれる。ベリルは有り難い気持ちで目を細めた。

「決行は1時間後だ」

ヘッドセットから仲間たちに最終確認を促す。すでに陽は昇りきっている。本来なら深夜の行動がベストだが、そんな悠長な事を言っていない。ベリルの勘がそう告げていた。

時計の針が決行の時間にせまる。

5秒前……4……3……2……1、作戦開始——西のB班、クラ

イドは合図して入り口に手榴弾を投げた。

とたんに施設内には警報が鳴り響く。

「G O G O G O！」

クライドは仲間を急かした。東のA班、ジェイクの処でも同じ事が行われる。

「迅速にだ！」

ジェイクは仲間に檄^{げき}を飛ばす。

< A班、突入した！ >

< C班もだ >

< D班も当然！ >

ヘッドセットから侵入の報告と銃声が届く。ベリルはニヤリと笑った。

「警戒は怠るな」

「！」

鳴り響く警報にミレアは見上げる。目の前にはセラネアとキリア。

呆然としているキリアに、セラネアは口の端をつり上げた。

「これからは私の命令は絶対だ」

「はい。セラネア様」

「あ、あなたはまさか！」

ミレアは恐怖心を必死で抑えて口を開いた。そんな彼女にセラネアはゆっくりと向き直りニヤリと笑う。

「！」

それだけでミレアの心にあつた疑問は確信へと変わる。

「そんな……どうしてっ」

「全てはお前の力のせいだよ」

「……？」

侵入してしばらく、クライドたちはいぶかしげな表情を浮かべた。

「おい、ベリル。本当にそのキリアがいるのか？」

<そのはずだ>

ベリルもいぶかしげに建物内を見渡す。

「何かあるのか？」

眉をひそめるベリルにアレウスが尋ねるとベリルは辺りを警戒しながら発した。

「統率がとれていない……指揮官がいないようだ」

「何？」

『キリアが指揮を執^とる』

そんな指示を受けていた組織の兵士たちは一向に指示を出さないキリアに戸惑いを感じていた。

指揮官のいない組織に爪を立てるのは容易い事だ。

<とにかく！ 俺たちはモニタールームを探す>

「頼む、ジェイク」

ベリルは残った敵を一掃しつつアレウスと通路を進んだ。

*嘆きの心

思ったほどの抵抗もなくジェイクはモニタールームを見つけ制圧した。監視カメラに映し出されている仲間と敵を見つめながら同じ部屋にいる仲間に指示をする。

「見取り図を探せ！ 急げよ」

そして左耳を押えた。

「ベリル、制圧したぞ」

<ミレアのいる場所を頼む>

「待つてろ……今探してる」

仲間が見つけてきた見取り図とベリルたちが映し出されている監視カメラを見てミレアを探し位置を照合していく。

「！ 解った。お前のいる位置から右に入った通路のグレーのドアだ」

<了解>

「気をつける、手前に敵が3人いる」

ジェイクはミレアの映し出されているディスプレイに見入った。

「……あそこにいるのはキリアか？」

何故か、その部屋だけ雰囲気違っていている事にジェイクは怪訝な表情を浮かべた。

*ぶつかり合う力

ベリルは目の前の敵3人を倒しドアを勢いよく開いた。

「！」

そこにいたのはミレアとキリア、そして見覚えのない顔の男。

「ようこそ」

キリアがニヤけた顔で言い放つ。

「ミレア様！」

「アレウス」

ミレアに駆け寄ろうとしたアレウスの前にキリアが立ちはだかる。

「行け」

「！」

しかしベリルが「自分が相手になる」と、ばかりにキリアの前に立ちアレウスをうながした。キリアはそれに口の端をつり上げる。

「1度負けたのにまだやる気か」

「また勝てる自信でもあるのか」

「なんだと……？」

ベリルの言葉に眉をぴくりと上げる。

「ミレア様っ」

すい……とセラネアがアレウスの前に立ち睨み付けた。

「どけ」

「クク」

「！ 彼の目を見てはなりません！」

その瞬間——アレウスの体は何かにつけられたように動けなくなった。

「！？ なんだ？ これは……」

目の前の男を凝視する。

「！」

アレウスはその黄金色の瞳に驚きの表情を浮かべた。

「その目はまさか……貴様」

「ククク。今頃気付いたか」

「アレウス、どうした」

動かなくなったアレウスにベリルは駆け寄る。その悔しげな顔を見やり薄笑いを浮かべている男に目を移した。

「奴は……俺と同じ人間だ」

「！ 何？」

「セラネア様は選ばれた者なのだ」

キリアが目を細めて発した言葉にベリルは眉をひそめる。

「？ キリアはそんな性格ではないと思っていたのだが」

ぼそりとつぶやいたベリルにアレウスは小さく舌打ちをした。

「奴に魅了されたんだろう……あの目には何者をも従わせる力がある」

「！」

『チャーム・アイ』というやつか。

アレウスが動けなくなった事とキリアの変貌振りにベリルはそう納得付けた。セラネアは低い声で静かに口を開く。

「お前はそこで見ているがいい。ベリル、キサマの相手はキリアだ」
「！」

背後でナイフを取り出す音が聞こえた。ベリルは振り返り同じようにナイフを鞘から抜く。

「ククク……」

キリアは嬉しそうに絞り出したような笑いをこぼした。そんなキリアをベリルは静かに睨み付ける。

「ミレア様っ」

一方、動けないアレウスはミレアに迫るセラネアに歯ぎしりした。

「さあ。我にその力を示せ」

「いやですっ」

その光景をモニタールームで眺めていたジェイクはヘッドセット

に声を荒げる。

「早く突入してくれ！」

「くだめだ！ 鍵がかかっている」

クライドが扉に体当たりするもドアはピクリとも動かない。

「パイナップル（手榴弾の1種の愛称）は！？」

クライドは仲間問いかける。問いかけられた仲間は苦い表情を浮かべ低く発した。

「この扉には利かない」

ダン！ とジェイクはデスクに拳を叩きつけた。

「どうする事も出来んのか……っ」

舌打ちをしてベリルたちのいる部屋のディスプレイを見る。

ベリルとキリアのナイフがぶつかり合う。

「うっ」

キリアはベリルの動きが以前よりも速くなっている事に気付いた。

「どういう事だ」

奴は右腕に傷を負っている。それは痛みを伴っている事も時折現れる表情で解るといふのに……いぶかしげな顔をしているキリアにベリルはその動きを止めた。

「人とは経験を積み成長するものだ。よもや私がお前の動きを見て学ばないとも思っていたのか？」

「！？」

あれだけの接触でこいつは俺の動きを読むことが出来るようになったのか！？ なんとという格闘センス！ キリアは喉の奥から笑いをこぼした。

「ク、クク…… お前を手なずける事が出来なくて残念だよ！」

「……っ」

銀色の刃がぶつかり合う度にベリルの目に表情が無くなっていく。

それは相手に容赦はしないという意思表示だ。

「！」

キリアはゾクリとした。このままでは……負ける。それだけは認めない……キリアは奥歯を噛みしめた。

その刹那、すい……とキリアが体を横に移動した。目の前にいたのは――

「！しまっ……！」

セラネアの瞳がベリルの目を捕える。

「ぐっ！」

体が自分の意思では動かせなくなった。

「ベリル！」

ミレアが叫び駆け寄ろうとしたがその眼前にセラネアは勝ち誇った笑みを浮かべて立ちほだかる。

「残念だったなあ」

「貴様っ」

キリアがニヤけた顔をベリルに近づけ、ナイフの先端をぴたりと胸に当てた。

「勝つためには何でも使えってね」

「！ あっ……ぐっっ」

少しずつナイフを胸に沈めていく。痛みで見開かれたベリルの目にキリアは歓喜の表情を浮かべた。

「ああ……なんという事を……っ」

両手で顔を覆うミレアにセラネアは容赦なくその腕をぐいと引つ張った。

「お前のために命を落としたのだ。さあ、その力を解放しろ。そうすればお前の命だけは助けてやる」

「私だけが助かるのなら意味がありません」

「では、お前のために命を投げ打った彼は無駄死にという事になる」「！？」

その言葉にミレアはビクリと体を強ばらせた。

「それでもいいのかな？」

あざ笑うようにセラネアはささやいた。

「う……っ。く……」

その痛みでセラネアの力から解放されたベリルは床に倒れ込む。

キリアはそれを薄笑いで見つめた。

「そうだ、お前は地面にはいつくばっていればいい」

「ベリル！ くそっ動け……っ動けよっ」

アレウスは必死で力を入れるがセラネアの呪縛からは逃れられない。その間にもセラネアはミレアの腕を強く掴み上げ、急かすように少女の体を揺さぶる。その目には狂気が見て取れた。

「さあ、どうした。我に力を示せ」

「う……あなたは……どうしてっ」

その言葉でセラネアはフツと我に返ったような表情になり目を細めた。

「貴様たちは民を残して逃げた。我の一族は、その民たちと力を合わせて必死にあそこから逃れたのだ」

「！」

セラネアはゆっくりと話し出した。

「統率者たちは民を見捨てて自分たちだけで逃げた。なんたる愚行
！」

「違う！ 統率者に従わなかった者たちが大陸に残ったんだ！」

アレウスの声にセラネアは薄く笑い恍惚とした表情を浮かべる。

「フ……今更そんな遠い昔の事などどうでもよい。我は今、その統率者が大事に抱えていた力を手にするだけだ」

「やめろ！」

「おお……セラネア様」

キリアは恍惚とセラネアを見つめた。

「ぐっ」

ベリルは胸を押えて立ち上がりふらつきながらアレウスの前に立つ。

「！ ベリル動くな。傷が……っ」

「まだ動けないのか」

ベリルは右手をアレウスの肩に乗せじっと見つめた。

「私の目を見る」

「ベリル？」

「……」

そのエメラルドの瞳に吸い込まれそうになった瞬間――

「！ 動いた？」

体が軽くなり自分の手を見つめた。

「！？」

にこりと笑ったベリルの肩越しに人影が映る。

「邪魔だ」

キリアがベリルの肩を掴んで思い切り引いた。

「うっ」

体勢を立て直せないベリルはそのまま地面に引きずられるように倒れ込む。

「キサマ！」

「お前の相手は俺だ」

笑って言い放つキリアを見つめ視界に入った落ちているナイフを拾い上げる。ベリルのものだ。

「！」

なんとしつくり来る握りなのだろう。芸術性の高いそのナイフはアレウスの手にも馴染んだ。これなら闘える。

「キリアあー！」

アレウスは鋭い眼差しでナイフを振り上げた。

*はかない夢の終わりと始まり

ベリルが投げ飛ばされるように倒れ込んだのはセラネアの足下。

「うつ……」

「……」

苦しむベリルをまるで虫けらでも見るようにセラネアは見下ろした。

「べ、ベリル……」

首を締め付けられているミレアは声も絶え絶えにベリルの名を呼ぶ。

「そこで見ているがいい。我は今、『不死』を得るのだ」

「……不死？」

もうろうつとする意識の中でベリルは聞き返す。

「統率者に代々、受け継がれる力。それは不老不死を与えるものだ」
「……」

ベリルはそれに目を閉じる。ああ、そうか。だからあれほど必死に己の命さえも引き替えにしようとしたのか……ミレアの苦しみをベリルは理解した。

「さあ、我に力を示せ」

「うつ」

「お前が死んだとて力は次に受け継がれるだけだ。さすればまた捕えればいい」

「……」

この男は私の家族を、一族を殺していくというの……？　こんな力のために！

ミレアの体から七色の光が広がった。

「おお！　これが不死の力……」

少女から発せられる輝きにセラネアは暖かさを感じ目を細めた。

「ミレア様！」

10秒ほどの光が収まりセラネアは彼女の首にかけていた手を離す。

「げほっごほっ……」

投げ捨てるように解放されたミレアは咳き込むが、そんな彼女などすでに眼中になくセラネアは自分の両手を見つめて体を震わせた。「これで我は不死となった。誰も我を滅する事は出来ない。我は永遠の支配者となったのだ！」

「……うっ」

歓喜の声を上げるセラネアの足下でミレアは哀しみに肩を落とす。

「ごめ……なさ……」

涙が床に落ちていく。

「ごめんなさい……あなたは死を望んでいたのに。私は……」
体を震わせる。

「私は……あなたを失いたくない！」

目を強く閉じて声を荒げた。

「我はこの世を支配せし者だ！」

そして、笑い声を高らかに上げるセラネアの背後に人影――

「！ げふっ！？」

左の脇腹に激しい痛みが走ったセラネアはそのまま倒れ込んだ。

「なっ何が！？」

驚きに痛みを与えた人物を見やる。そこに立っていたのは……

「っベリル……？」

「セラネア様！」

キリアはセラネアに駆け寄りベリルを睨み付ける。

「貴様っ」

無言で立つベリルのその手にはナイフ。装備していたもう1本のナイフだ。

「……？」

ベリルは自分の体を確認するように目を細めて手を見つめた。あれほど深々と埋められたナイフの傷の痛みも無く、ベリルの胸には

その跡が大量の血痕として服に染みこんでいた。

「ベリル……」

アレウスはベリルを凝視しながらミレアに近づく。

「ごめんなさい」

謝り続けるミレアの肩にアレウスは手を回し、なだめるように優しくさすった。ベリルはそんな彼女に顔を向ける。

「これも運命ならば私は受け入れるだけだ」

小さく笑い、ささやくように発した。

「こ、殺せ……奴を殺せ！」

セラネアは苦しみながらベリルを睨み付けキリアに命令した。

「ベリル」

キリアの鋭い眼差しがベリルを刺す。それをただベリルは無言で見つめていた。

「本当に不死に？」

「使ってしまった……私はなんて事を……」

ミレアは自責の念を込めてつぶやき頭を垂れて絶えず涙を流す。

「貴様……よくもセラネア様の邪魔をしてくれたな」

キリアがナイフの切っ先を突きつける。

「……キリア、奴の呪縛からまだ逃れられないのか？」

「呪縛など無い！」

ぶつかり合う刃——小さな火花が舞った。

「どういう事だ？」

ジェイクが驚きで画面を見つめた。あの血の量からしてベリルは致命傷を負ったはずだ。しかしミレアから発せられた光の後ベリルが立ち上がり今は闘っている。

「頭が混乱してきた……」

ジェイクは頭を抱える。

「おいつ中の様子はどうなってる!？」

クライドは左耳を押えてジェイクに問いかけた。

「どうしたっ答える！ まさか……」

「いや、大丈夫だ」

その言葉にホッとす。

「とりあえず、ドアを開ける作業は続けてくれ」

「わかった」

ジェイクはクライドに指示をして画面を見つめる。

「俺の目は正常なんだろうな……？」

そして耳も疑った。仲間の全てが聞いていたあの言葉は本当なんだろうか？

『不老不死』

あの少女が不死の力を持っていたなどと誰が信じるだろうか……ベリルとアレウスのヘッドセットは闘いによって床に転がっているが、彼らの言葉は拾われていた。

「それが本当なら……ベリルは不死に？」

呆然と画面にジェイクはつぶやいた。

「今度は助けは無いぞキリア」

「……」

静かに見つめるベリル。

「俺に勝てるはずがない」

「負けると思ったから、奴の助けを借りたのではないのか？」

「！」

キリアはカッとなりベリルに飛びかかった。ベリルはそれをすんなりかわし冷たい瞳をキリアに向ける。

瞬間、キリアは絶望にうちひしがれた。そして奥歯を音が鳴るまですみしめる。

「認めない。貴様に負けるなど！」

「キリア……」

彼はベリルの瞳に哀しみを見て取った。だがそれをキリアは『哀れみ』ととったのだ。闘う事の虚しさを、ベリルはその瞳に浮かばせただけだというのに……

「！ 闘う事に何の意味があるというんだ！？」

突進してきたキリアにベリルは声を張り上げた。

「うるさい！」

結果は見えている。それでもキリアは闘いを求めた。

「……っ！」

ベリルは眉間にしわを寄せキリアの刃をかわしその胸にナイフを埋める。

「ぐ、う……ベリル……っ」

「死をもつてしても、お前は負けを認めないのだろう？」

か細く発するベリルの腕にしがみつきキリアはニヤリと笑った。

「と、当然だ。俺は、負けてない」

ずるずると床に倒れ込む。

「……」

それをただベリルは静かに見つめた。

「ば、ばかな！」

その光景を目の当たりにしたセラネアは信じられないように声を震わせた。そんなセラネアにゆっくりと近づくベリル。

「もう、お前には何も無い。諦めろ」

怒りを帯びた口調で発したベリルにセラネアは口惜しげに唇を噛んだ。

「不死も得られず、このまま死を待つのみか。この我が！」

その姿にベリルは目を細める。

「不死……こんなもののために幾つもの命が消えたのか」

そんな青年をセラネアは見上げて唸るように口を開いた。

「我は間違っていた……キリアではなくお前を魅了していれば不死を得られたものを……」

「……」

何を言ってもだめか。ベリルは呆れたように小さく溜息を吐き出し目を伏せた。

「助ける価値も無い」

言い捨ててミレアに近づく、そして手を差し出した。

「立てるか？」

「はい……」

今までと少しも変わらない優しい瞳にミレアは目を合わせられない。

「……っ」

謝ろうとしたミレアにベリルは静かに頭を横に振った。

「そこまで背負う事は無い」

「ベリル」

言葉を詰まらせ手の甲で涙を拭う。そんな彼女の背中を優しく2回叩いた。そうしてベリルはヘッドセットを拾い上げ左耳に装着する。

「ジェイク」

＜ベリル！ お前…… 本当にベリルなんだな！？＞

それに苦笑いを返す。そして目を閉じ小さく溜息を吐き出すと、ゆっくり発した。

「私の事は皆、聞こえていたと思う。まあ、うろたえても仕方がない。これからもよろしく頼む」

＜おう！＞

＜お前がお前のままならそれでOK＞

＜よろしくな！＞

＜仕方ねえな＞

口々に返される言葉。ベリルはにこりと笑った。その表情にミレアも少し笑う。

刹那——入り口の方から爆音が響く。

「ベリル！」

扉が大きな音を立てて倒れ込みそこからクライドが姿を現した。

「やっと開いたぜ」
憎々しげに床に転がる扉をクライドは見つめた。

*その名は悪魔か宝石

「悪魔だ……貴様は……」

息も絶え絶えのセラネアはかすれた声で言い放つとベリルを指さした。それにベリルは動じることなく無表情で近寄り、しゃがみ込む。

「今頃、気付いたのかね？」

「な……っ!？」

薄笑いで言い放つベリルにセラネアは初めて恐怖した。

【ベリル・レジデント】

緑は悪魔の色とされている。

ベリルとは緑柱石から作られる宝石の総称だ。

そしてレジデントは『居住者』を意味する。

『悪魔の器』と名付けながら科学者たちは彼に人類の理想を描いた自分たちのした研究が間違いではなかったのだ。と思いたかったのかもしれない。人は皆、同じである。と証明したかったのかもしれない。

その真意は定かではないが彼らが夢見たものはベリルの中に生きている。

<よし、撤収だ!>

ジェイクが意気揚々と指示した。敵の生き残りを拘束し一緒に外に出る。

「じゃ、報酬は振り込みでな」

「うむ」

何事も無かったようにジェイクは軽く手を挙げた。皆がベリルに挨拶を交わし去っていく。外に連れ出された敵はジェイクが「責任を持って面倒みる」と言っただけでジープに詰め込んだ。

彼らには『制裁』という名の下働きが待っている。むやみに命を奪うのではなく更正の道を進ませる事、それがジェイクたちのもう1つの仕事でもあった。

「……」

仲間たちが去りベリルは荒野を見渡し目を細める。

「我々も戻りましょう」

「……でも」

アレウスが故郷に帰るように促すがミレアはベリルから離れる事をためらった。ベリルはそんな少女に小さく微笑む。

「……っ」

ミレアはそんなベリルの表情に胸が痛んだ。彼は何も言わずに笑いかけるがミレアにはその意味が痛いほど解っていた。

『お前はもう何にも狙われる事は無い。自由に生きる事が出来るのだ』

「私は……あなたをつ」

“愛しています”

そう言いかけた時――

「死なない相手を好きになるのは不幸だよ」

「ベリル！」

少女の呼び止める声にベリルは構わず自分の車に向かった。

「ミレア様」

「……ベリル！」

ベリルは彼女の求める手にも応じない。ミレアはきりりと目をつり上げてベリルの元に駆け寄った。

ベリルの目の前で立ち止まり荒い息を整える。

「1人で勝手に終わらせないで！」

「お前の希望には応えられないと解っているのか？」

「!？」

その言葉に喉を詰まらせる。

「ベリル……」

困った顔をしているミレアに目を細めて顔を近づけた。

「！」

優しいキスをミレアに落とす。唇を離す時、耳元でささやいた。

『お前の記憶に残るだけでいい』

幻想の住人となったベリルはエメラルドの瞳でミレアを見つめ車に乗り込んだ。

「……」

ミレアは遠ざかる車を眺め、ある1つの予想を立てた。彼はあらゆる人種のDNAを持っている。

「もしかすると……我々のDNAも？」

A国が集めたDNAの中に彼らのDNAがあり、それを科学者たちが使っていたとしたら……

「彼の瞳こそが本当の『魅了する瞳』なのかもしれない」

もしそれが事実だとするならば、ミレアは自分たちの遺伝子を奇しくも永遠に残した事になる。いつか滅びるかもしれない種族——彼の中には、すでに滅びた種族のDNAも存在するかもしれない。

「……ノアの……箱船」

ミレアは自然とそれを口にしていた。彼女の考えは憶測にしか過ぎない。だが、それが間違いとも言いきれない。

少しの涙をぐいと拭いミレアは笑顔を空に向けた。

「ま、どっちでもいいじゃない」

ベリルの真似を試みた。そうして歩み寄るアレウスに振り返る。

「さ、帰りましょう」

「はい」

アレウスとミレアは譲って貰ったジープに乗り込み、ひとまず近くの街に向かった。不死の力を使ってしまったと父に話したらどんな顔をされるだろうか。

ミレアは少し不安になったが彼女は胸を張ってこう言うのだろう。
『私は正しい者に力を使いました』

決意の言葉を秘め、荒野を眺めてミレアはニヤリとした。

「ウフフ……」

「？」

一人でニヤけているミレアにアレウスは怪訝な表情を浮かべる。
実は隠している事が1つあった。

《ベリル〜聞こえてますか〜？》

「うわっ！？」

ベリルは驚いてハンドルを持つ手が揺れた。

「……？」

頭の中に響いた声に眉をひそめる。

「クスクスクス……」

「ミレア様？」

「どういう事だ？」

《実は〜力を使った者同士のつながりは強くなって、こうして会話
が出来ます〜》

「……」

ベリルの表情がみるみるうちに眉間に深い縦じわを刻んでいく。

「お前……それで素直に従ったのか」

《正解です〜》

はしゃぐミレアの声にベリルは頭を抱えた。

《でも安心してください》

「！」

ミレアの声が少しトーンを下げた。

《ずっと会話が出来る訳じゃありません。せいぜい5年だと思いま
す》

彼女にとって、それは悲しい事だ。

《あなたは私の大切な宝石です。悪魔なんかじゃありません》

「……」

ベリルは静かに微笑んだ。

E
N
D

***その名は悪魔か宝石（後書き）**

* 完結しましたです（´・ω・｀）ノ

最後までお付き合いくださりありがとうございます。

読んでくださった皆様が少しでも楽しんでいただけたら幸いです。

河野
る宇

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7262q/>

Marvelous mercenary

2011年8月30日03時25分発行